- STRIKE WITCHES - [戦車と魔女・Panzer-und-Hexe]

茄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
-ＳＴＲＩＫＥ　ＷＩＴＣＨＥＳ-［戦車と魔女・Ｐａｎｚｅｒ－ｕｎｄ－Ｈｅｘｅ］

【Ｎコード】
Ｎ７８２１Ｎ

【作者名】
茄子

【あらすじ】
――暑い暑い４３年の６月、僕は…あの魔女達を忘れられない…――

１９４３年、一応の終結を迎えた北アフリカの軍港に１人の扶桑魔女が降り立った。

装甲歩兵となった彼女を待ち受けていたのは苦難の連続、出会い

と別れを繰り返し、少女達は強く生きて行く。

これは、そんな１１人の魔女達を記録したものである。

私が生きるとこ（前書き）

この小説を書くにあたり、島田フミカネ氏及びＰｒｏｊｅｋｔ　Ｋａｇｏｎｉｓｈの皆様に絶大な感謝を込めて。

私が生きるとこ

時は西暦一九四二年。ネウロイが各地の土を汚してゆく中、北アフリカの戦闘でハルファヤ峠に孤立した連合陸軍部隊を救出するために立ち上がった一二人のウィッチがいた。ブリタニア王国陸軍所属の彼女達は祖国で製作された陸戦ユニットを利用しネウロイと交戦。連合空軍と残存部隊との絶妙な連携をとった善戦の末、多くの陸戦型ネウロイを破壊し、孤立していた部隊の救出に成功した。

この戦闘とブリタニア王国陸軍、第四戦車旅団C中隊の行動は全世界に報道される事になる。その後、資源と魔導エンジンに余裕がある国は陸戦用ストライカーユニットをこぞって設計・製作・現地へ投入する不毛な競争が始まった。しかし、急いで前線へ配備させるあまり輸送の大半はウィッチ一人とユニット一機、整備パーツは後送してくる「アフリカ弾丸旅行」と称された方法でアフリカ戦線へやってきてしまった。転属された各国のウィッチ達は満足に同型のユニットと編隊を組むことも出来ず、統合本部の辞令で無理矢理に出身国の違うウィッチ達で部隊を編成させられる事になる。この事については現地のウィッチ達に抵抗は無く、以外にも「スオムスの独立義勇隊みたいで面白い」とのコメントが各隊の隊長から返って来る始末であった。

それは北アフリカ最大拠点『トブルク』より約九〇〇キロ離れた都市『トリポリ』来訪している第三〇九連合軍統合戦闘機械化装甲団「Ｒｏｌｌｉｎｇ（ローリング）・Ｗｉｔｃｈｅｓ」も例外では無かった。今日も先日の戦闘による損害を補うため、トブルクに存在する連合軍人事支部へ補充兵の申請を行っていたので、今回は補充兵のお迎えが来訪の目的である。

いくら沿岸の都市でもアフリカの乾季である１０月までは最低気温は２７度しか達さず、最高気温は三〇度を超えるので、暑い。そんなトリポリの港に１隻の連合軍属貨客船が入港する。全長が六〇メートル、全幅が一五メートルほどの船は数十分かけて船着場へ到着、荷降ろしを始めていた。貨客船の船首には［八女（ヤメ）］と白ペンキで塗られていた事から、扶桑皇国製の貨客船だと分かる。

「え…えぇ～っと…確か私のストライカーユニットは白い木箱に納まってて…赤い札が…アレだ！！…あった！あった！」

漁港も兼ねる船着場であるため魚介類の腐臭が酷く、乗客は荷物の配達を港の入り口まで頼み、さっさと乗降口を後にする中。荷降ろしを続ける船着場で大きな木箱にしがみ付く不審な少女がいた。

彼女の名前は竹西（タケニシ）・一美（ヒトミ）。扶桑皇国陸軍出身の軍曹で、年齢は一三歳。何故この歳にして下士官並の階級であるかと言うのは話さなくても良いだろう。扶桑の西に位置する大きな島の北部にある気高い山々に囲まれた村で育ち、五歳の時に家で飼っていたチャボの『吾郎』と契約を果たした後、僅かながら魔法を使用することができた。戦争が始まってからは家の食い口を減らすため、ウィッチを募っていた扶桑陸軍に入隊、一度は航空歩兵の体力テストに合格、ずば抜けた測定結果のため筆記試験無しで練習飛行にまで漕ぎ付ける異例の事態が起きたが、やはり体力だけでは不十分な箇所があり、複座式の練習機（アカトンボ）を訓練時に何機も墜落させている。実際なら強制除隊をされて当然な行為をしているが、その事を惜しく思った扶桑陸軍人事部は彼女が最初に配属される場所をアフリカに選んだのだ。

「ハァ～～…（もぅ、何で朝食中に西住中尉が私の配属辞令をいきなり机に置いてくるのよぉ。『昼飯前には出発だ』なんて言われて思わず了解しちゃったけど、原隊の配属先を見たのはその後だもんなぁ～）」

一美は長旅の疲れからだろうか、長い溜息をついている。まさか練習機を壊した弁償が理由だと言う事には気づいていないのだろう。
中には新品の飛行用ストライカーユニットが入っているはずの大きな木箱の隣には一美がちょこんと体育座りしていたので、彼女の近くに寄ってきた荷運びトラクターは木箱を回収せずに人ごみの中へ消えて行く。結果として一美の身の丈以上に大きな木箱は波止場に釘付けとなった。
さすがに持ち上げる事も適わず、引き摺るのは扶桑軍人の威厳として許されない。どうしようも無い事態に深く溜め息をついた一美の前に一台のトラックが停車する。しめた、相手が軍なら拾ってもらえるかもしれない。

「すいませ～ん、この辞令に書かれてる部隊に行きたいのですが～」

一美は背伸びをしながらトラックの運転席に辞令の入った封筒を見せる。革張りの窓覆いからニュッと手が伸び辞令を引っ手繰る。しばらくトラック内の運転手は黙ったままだったが、いきなり車体のドアがばたんと開いた。

「お前が私達の新しい隊員なのか！　良かったぁ～。町中を探し回らずにすんだよぉ～！！」

手間が省けた事に喚起している運転手は一美とさほど年は変わらない容姿をしているが、明らかに扶桑の人間ではない。一美が持つ綺麗な黒髪のロングヘアー、扶桑の流行髪型と違い、栗色のショートヘアを後頭部で結んでいる。今まで日差しの弱い場所にいたお陰で綺麗な一美の柔らかそうな肌と相対し、彼女の顔は強い日差しのせいか何処と無く赤っぽい。瞳の色も茶色と青色で大きく違うし、第一スタイルが大きくかけ離れている。　穿いているズボンも一美

の真っ白なローレグでは無く、ズボンの上から薄青のタイツを穿き込んでいる。
彼女は大きく開いた茶色い防暑シャツの胸元に下げる認識票を取り出し、一美にちらつける。

「私はマリア・T・フィールランド。リベリオン合衆国陸軍第九師団…まぁこれはべつにいいや…まぁ簡単に言えばリベリオン陸軍の中尉さんだよ。ようこそ！！我等が第三〇九連合軍統合戦闘『機械化装甲団』ローリング・ウィッチーズへ！！」

マリアは右手を一美の前に差し出し、握手を求める。

「あ…あのぉ、フィールランド中尉どの…今の部隊名って…」

一美は額からダラダラと汗を垂らしながらマリアに質問する。

「お？　私達は第三〇九連合軍統合戦闘機械化装甲団・ローリン…」

「嫌だぁぁぁぁぁ！！！！！」

一美は両手で顔面を覆い、その場の人たちが驚いて振り返るほどの大声で泣き始める。これまでの長旅で疲れていた事と、誰とも接せない寂しさから開放された状態に先ほどの言葉はどんな刃物よりも一美の心に深く突き刺さっただろう。何も無いアフリカの空を飛べると言う希望だけを持って単身で海を渡った少女を裏切る事になろうとはマリアも予測していなかった。

「おおおちつけ！！？？　ほら、きっと疲れて泣き出しちゃったんだなぁ？君の姉さんになる人たちがお風呂にいるから、入るついでにご挨拶行こうか？　ね？？　（何か何だか知らないけど…隊長は

公衆浴場から出てこなくなって丸一日だし。ミイラ取りはとっくにミイラだしなぁ…でも、この事態は私じゃ解決できないって…ここは浴場まで連れて行くか…）」

泣き喚く一美を抱きしめ、彼女の口を自慢の胸で押さえつける。こうすることで必要外の騒音をカットでき、通りすがりの人が野次馬になる心配も無くなった。マリアは一美を抱き締めながらトラックの運転席に登り、すすり泣きに変わっている一美を助手席に座らせる。マリアの固有魔法を利用し、トラックの荷台へ木箱を浮遊させながら積載させ、自身は再度運転席によじ登る。周囲に集る人ごみをクラクションで追い払い、この運命的な出会いを果たしたトリポリの漁港兼船着場を後にした。

私が生きるとこ（後書き）

感想お待ちしてたりします。自分のもう一つの小説などを見てくれるとあり難いです。

ファーストイントルーダー

「そうか～…それであんなに泣いちゃったんだねぇ　まぁ…これでも食べて落ち着いてね♪　リベリオンの製菓会社が軍と共同で作ってるんだよね。なんでもコレを食べるとウィッチの魔力が回復するんだってね」

トリポリの賑やかな市場を走り抜けるトラックの運転席には二人の少女が座っている。二人のうち運転席の少女、マリアはリベリオン陸軍の特徴的なカーキ色の上着ポケットからチョコバーを取り出し、助手席に座る元気が無い少女、一美の眼前に差し出す。彼女は渡されるままにチョコバーを口へ運び、半分まで一気にかじる。おいしい、と一美の口から漏れたとき、一美の表情から曇りが消えた。

「まぁ補給が薄いアフリカでも三〇九なら補給に困らないね。…まぁ…お菓子だけだけど…ねぇ…」

マリアは途中まで自慢げに話していたが、途中で言葉に詰っていた。その途中にも一美はチョコバーの全てを口に納めていた。

「お菓子だけ？　どうしてですか？」

笑顔を取り戻した一美を見たマリアはほっと胸を撫で下ろした。隊長と対面する前に泣き止ませていないと自分に責任が回ってくるはずなので、それだけは絶対に避けたかったらしい。トラックは市場沿いの大きな車道に出た後、道なりに進んで行く。

「まぁね。私の親がその会社の社長なんだよね。会社と軍の関係を

深めるために私をアフリカまで派遣したのね。会社のコネで入営直後から准尉の階級を貰ったけど、それは嬉しくなかったね。だから私は私自身の腕で今までのし上がったんだよね。ネウロイの撃墜数は二十一…小型が十八で中型が三で大型は〇、これは今までのユニットで稼いだ数だよ。今日はようやく本国から新型ユニットが届くんだよね～。楽しみだね！　ははは！！！！」

マリアは右手でハンドルを叩いて喜びを表現している。

「撃墜二十機以上！？　凄いじゃないですか！！」

涙跡を拭っていた一美も目の前にいる手練れに興奮する。

「だろう？　陸上ユニットも捨てたもんじゃないんだぞ～。…おおっ、あっちに第三〇一装歩団のウィッチ達がいるな♪」

トラックは市場を抜けて小さな噴水の前に停車する。噴水の向こう側には三人の少女が雑談をしていた。マリアが声をかけるだけで少女達はわらわらと集まってきた。

「こんにちはフィール中尉！　今日もお菓子ありますか！！」

金髪のショートカットをロマーニャ陸軍の略帽に隠した少女が元気一杯に運転席へ近寄る。一美に負けず劣らずの身長だったが、陸戦用ストライカーユニットを履いたままなので身長が伸び、簡単にマリアと話すことができた。他の二人はゆっくり、後ろからノシノシと歩く。

「いつも言ってるだろう、私はお菓子の無料配布所じゃないんだってね。ほら、いつもの3人分だぞ～」

マリアは運転席に置いてある鞄から三つの板チョコを取り出し、期待の目を向ける彼女へと手渡す。

「ありがとうございます！！　って、誰ですか？　この人は？」

当初の目的を果たした少女の視界にようやく一美が認められる。

「この子は第三〇九装歩団の補充員だよ。本当は扶桑の航空歩兵だったんだけど…辞令の手違いか何かでこっちへ来ちゃったんだね。」

『航空歩兵』と言う言葉を聞いた途端に少女はハッとして後ろへ下がる、その表情も段々と険しくなって行く。

「ねぇねぇ…あなたは航空歩兵なの？、いや、『だった』の？」

少女は嘲笑的に一美へ言葉を投げかける。どうやら彼女達は航空歩兵に良いイメージを持っていないようだ。

「…わ…わたしは…まだ陸戦兵じゃ…ない…」

一美は喉を震わせて反論する。三対一では口喧嘩でも不利な状況だ。

「あはははは！　こりゃケッサクだわ！！　空も飛べない陸も走れない。そんなんで良く軍に入れたわね？　まさか扶桑の入営試験はアナタみたいな馬鹿でも受かるザル試験なわけ！？」

「やめろ！　今は扶桑の軍事を挟む時じゃないだろ！　一美は単な

る辞令の手違いで…」

思わずマリアが仲裁に入る。どんな形でも自分達の隊に着任した者なら家族も同然だ、罵られる光景に耐え切れるはずも無い。

「コラ！　そこまでだサンドラ！」

マリアの言葉を遮ってもう一つの仲裁が割ってはいる。一美を挑発する少女の襟首を引っつかみ、脳天に一発の拳骨をかましたのは後ろからやって来た彼女の同僚だった。

「フィールランド中尉殿。申し訳ありませんでした！」

ピシッとした敬礼で謝罪する少女は容姿こそ大人びているが、声色は未だに子供の名残をもっている。

「良いよ良いよ、この暑さじゃ双方ともまともに人の話を聞いてないと思うしね。あとサンドラ曹長は疲れ気味だと思うからパトロール後にちゃんと風呂に入れてあげてね。ルチア曹長」

上着から数枚のコインを取り出したマリアはトラックの窓から身を乗り出し、サンドラ曹長に制裁をかけたルチア曹長の手のひらへ握らせる。トリポリの公衆浴場なら無料で入れるのである、なのでこのコインは風呂上りに何か飲んでくれと言うメッセージだった。転じてこのメッセージは『頭を冷やせ』とも見取れ、ルチア曹長も怪訝そうな表情をした。

「こ…光栄であります…それでは私達もパトロールへ戻りま…」

その時、トリポリの街中にけたたましい警報機の雄叫びが響き渡る。重低音から始まったサイレンなら偵察に来た陸上ネウロイが接

近する合図、高音から始まるサイレンなら大型の飛行型ネウロイが接近している合図だ。現在発動した警報は前者であるので住民ごと避難地へ撤退する必要は無いのだが、外出禁止令も兼ねるので住民達は急いで最寄りの建物へ逃げ込んだ。

「ネウロイ！？　なんでこんなちんけな市街地にまで侵攻してきたの？？」

三人目の少女が全員分の武装を抱えて二人に合流する。

「きっと偵察に出現したネウロイとパトロールに出た第三〇五装歩団がかち合ったんだよ！！小型だからって碌に報告もしないで戦った結果だと思うよ！」

マリアの表情が一気に険しくなり、ダッシュボードに入っていた装填済みのコルトＭ１９１１自動拳銃を取り出して車外へ飛び出す。

「一美はユニットを穿け！！これは緊急事態だ！！」

トラックの幌を取り払うと、荷台からユニットが入る木箱が露わになった。

「我々はここでネウロイを迎え撃ちますから、中尉は自らのユニットを取りに言ってください！！」

「わ…わかった！！」

ルチア曹長が自らの持つブレダ三八・八ミリ機銃を点検しながらマリアに一時撤退を促す。ルチアの持つブレダ機関銃は銃身をなるだけ切り詰めた改造品を背中に二挺背負い、両手で四七ミリ高初速

砲を抱えている。彼女達が穿いているユニットはロマーニャ陸軍が製造するカルロ・アルマート中戦車の系列であり、世界レベルで見ると型落ちの感が否めないが現地駐在の威圧や小型ネウロイ相手なら十分に活用できる。因みに本シリーズはガリア解放軍にも払い下げており、知名度はそこそこ高い。

「アンタも早くユニット穿けば！？死にたいわけ？？」

すでに運転手のいないトラックの助手席から動こうとしない一美に戦闘準備をするよう喚くサンドラが穿いているユニットはルチアの穿くＭ１３より古いカルロ・アルマートＭ１１中戦車といわれるユニットだ。前者の砲口径より十ミリ少ない三七ミリ砲をベルトに巻き左腰にマウントすることで両手をフリーに可能、ブレダ機銃を両手で射撃することができる一見優れものなのだが。実は本ユニットの採用も四一年に終了しており、今でも穿いているウィッチは物好きかユニットを良く壊す者のどちらかである。

「ネウロイ進入経路出ました！　トリポリ南方より時速二五キロ、歩行で進入します。経路的には…この噴水がルート直上だそうですよ！？」

三人目の少女が穿いているユニットはロマーニャ陸軍のアウトブリンダＡＢ４１装甲車であり、二人が穿いている履帯タイプのユニットとは違い、大腿とふくらはぎにゴムホイールを一つずつ装着したものである。彼女は元来の武装であるブレダ二十ミリ機関砲に加え、巨大な軍用無線機を背中に背負わされている。

「ば…馬鹿にされたお返しですよ？？」

一美も負けてはいられない。もしかしたら木箱に入っているユニ

ットだけでも飛行型かもしれないからだ。異動が失敗でも、割り当てられるユニットまでは間違う筈が無いから…一美は助手席から飛び降り、荷台へ登るためのスロープへ手をかけた時、辺りをとてつもない衝撃が襲った。

トリポリからネウロイまでの距離は、ほんの数十キロまでに迫っていたのだった。

相棒

「きゃっ！　…痛てて」

「早く起きなさい！　すぐそこまでネウロイが来てるのよ！？」

トラックの荷台に登れず地面に落下し、尻餅をついた一美をルチアが急いで起こす。ルチアの後ろではもう一人のウィッチが背負っている無線機を地面に置き、ダイヤルを弄っている。先ほどの衝撃で無線機の周波数が狂ってしまったようだ。彼女は必死に幾つものダイヤルを回し、辛うじて通信が復旧させた。

「《……こちら…ロマーニャ陸軍アフリカ方面軍所属第四九機甲部隊…現在ネウロイと交戦中…誰か聞こえていたら応答してくれ！！…私は隊長のフランキ中尉だ！！》」

無線機からは雑音と一緒に男の声が聞こえてくる。無線機ごしには銃声や砲声、戦車のエンジン音が耐えず、男もかなり必死なようだ。

「こちら第三〇一連合軍統合戦闘機械化装甲団です！！　大丈夫ですか！！？？」

彼女は必死に受話器へ向けて言葉をかける。ネウロイと交戦中とあればトリポリの周辺、先ほどから聞こえる砲声の主だろう。

「《市内のウィッチか！！ありがたい！！現在、我々は戦力の温存を考えてトブルクまで撤退する！！我々は第三〇五装歩団の負傷者も連れているので組織的な戦闘は不可能である。頼むから残りは君

達でやってくれ！！》」

聞こえたのは想定外の報告だった。ネウロイに対しての主要攻撃手段がウィッチによる魔力を込めた攻撃でしかないのは事実だが、それを見据えてこの部隊は負傷者を連れてさっさと撤退してしまうのだろうか。なぜ負傷者だけをトリポリに搬送し、残りの戦力を以てトリポリを死守する行動をしないのだろうか。

「サブリナ、その行動を阻止させて！　撤退なんて無茶なんだから！！」

無線機と対面する彼女、サブリナ軍曹へ指示を出すルチア。

「はい！！　《こちら三〇一、トリポリには未だ多くの市民が避難できていません！！なのにネウロイを市内に引き込んで市街戦をやれと言うのですか！？》」

彼女は焦りが止まらない。偵察に出没する小型ネウロイであれば既存の火砲でも撃墜可能だが、戦闘に特化した中型以降のネウロイだとそれは難しくなる。体躯が大きくなればネウロイの装甲厚が高まり、コアまでの距離が離れてしまうからだ。たとえ砲撃を命中させても、コアを破壊する前に装甲が自然治癒してしまう。

「《来るぞー！！…伏せろ！……》」

無線機からはその言葉と爆発音の後、ノイズしか聞こえてこなかった。その後、いくら無線機のダイヤルを回しても二度とフランキ中尉と連絡が繋がる事は無かった。

「前衛に出ていたロマーニャの部隊がやられたぞ！」

「あの役立たず共め！！貴重なウィッチともどもくず鉄になりやがったか！！」

「トリポリだけは死守しろ！！タイガーを前面に押し出せ！周りを四号戦車で囲め！！」

噴水の周囲では怒号が飛び交い、噴水から少し離れた大通りではカールスラントの戦車部隊が右往左往している。一美がようやく荷台に登り、備え付けのバール…のようなもので木箱を開けようとした時、一台のキューベルワーゲンがトラックに衝突した。一美はまたしても吹き飛ばされ、噴水の中へ落ちる。
徐行してはいたものの、容易にトラックを横転させてしまった。キューベルワーゲンの運転手は二言三言ルチア曹長に謝った後、大通りへと消えてしまった。

「うわぁ…水浸し……濡れちゃった…」

一美はずぶ濡れになりながら噴水から起き上がり、木箱を見やる。トラックの荷台から転げ落ちた木箱は粉々に砕け、横倒しになったユニット固定具が露になっていた。

「いけない！！」

壊したら怒られる、その緊張が彼女を揺り動かした。いそいで噴水から抜け出そうとした彼女のブーツにコツンと何かが当たった。

「（なんだろう？ってこれ扶桑刀じゃん！？）」

拾い上げた物体は扶桑陸軍で下士官以上の兵士に広く使われてい

る九五式軍刀だった。一美はアルミ一体成型の柄を掴み駐爪を外す、爪を外すことで鞘と柄が分離し、カーキ色の鞘から刀身を引き抜けた。反りは浅く、樋も入っていない。一見すればただの水浸しの軍刀だが、刀身が微妙に青みがかっている。それにさきほどから何物かが一美の頭の中へ語りかけてくるのだ。その声の意味を聞き取ることができなかったが、段々と意味が伝わるようになる。

〔やれやれ…真っ黒の世界からやっと解放されたってのに、起きたら溺れる寸前とか笑えないぜ。ニワトリを水に沈めるなんて、俺の頭を水平線（フラットライン）させて食べようとしたのかい？誕生日が晩餐会かと思ったら笑えないぜ？お友達（カウガール）〕

「だ…誰！？」

一美は声の主を探すも、周りに男の姿は無い。いるのは三〇一のウィッチが三人だけ、あるのは横転したトラックと自分のユニットだけである。となれば声の主はこの刀となる。

〔誰？って言われてもな…俺はアンタのそばにいつもいるんだぜ？アンタが五歳の時からずっと、な？　そして今、こうやって会話できるのはこの扶桑刀のお陰だ。この刀は扶桑陸軍の新製品だそうでな、折ったら指名手配モノらしいな。〕

「あなた…もしかして吾郎なの！？　そしてやっぱりこの刀のせいなのか！？」

刀に向けて話しかける一美。

〔そういや…そんな名前（エイリアス）で呼ばれていた時代もあったなぁ。アンタが言いやすいヤツで結構だ、最適な名前が見つかるまで吾郎で呼ん

でくれよ？結構気に入ってるんだからな〕

「わかったよ吾郎。あ！　そろそろネウロイがココに来ちゃうんだよ！！どうすれば良いの？吾郎」

ルチアは周囲に散らばる木片を片付けていると、噴水の中で立ちながら一人の少女が刀に語りかけているのを見つける。

「アナタ、何やってるのよ…」

奇異な目で一美を見つめる。

「あ…それがこの扶桑刀、使い魔と話ができるんです！！　聞こえないんですか！？」

光る扶桑刀をルチアに見せる。刀を振り回すと〔やめてくれ！〕といった声も聞こえてくる。

「はぁ？　アナタ噴水に落っこちて頭でも打ったの？　さっさとココから…」

木片を片付け終わったルチアの手前に巨大な戦車が停車する。円柱形の砲塔は市外を向いて動かなかったが、キューポラのハッチを開けて一人の軍人が出てきた。彼は黒い制服を纏って御揃いの制帽を被っている。その上から皮製の耳当てをしている事から戦車長だと見て取れる。

「君達に良いニュースと悪いニュースがある。どっちから聞きたいか？」

「良いニュースから聞かせてください！！」

無線機を噴水の脇に置き、手持ちの二〇ミリ機関砲を手に取るサブリナが車長に言う。

「わかった。　トブルク本部の飛行場は現在大急ぎで航空歩兵を空に上げている。周辺空域を飛行中の航空隊が一つも無いからな。増援はネウロイがここ、トリポリ到着後二〇分になる。それ以下に到着するのはありえないだろうってさ。Ｂｆ１０９Ｇの偵察型を穿いたウィッチ達を先頭にしてるらしいが、どうも対地型を穿いた子達は遅れるそうだ」

「悪いニュース…悪いニュースはなんですか！？」

噴水から出た一美が車長に尋ねる。

「あぁ…実はトブルク本部が、今回の防衛が失敗したらトリポリを手放す事に決定したそうだ…」

車長は残念そうに制帽を目深に被る。途端に戦車のエンジンが唸りをあげ、履帯が徐々に動き始める。

「まぁ心配するな新入り、トリポリはいつもネウロイの危険性にさらされているわけだ。俺のタイガーが死ぬ時が俺の死ぬ時、トリポリ防衛隊の意地を見せてやるさ。死ぬなよ！　若いの！！」

彼はキューポラから右手のみを出し、軽く手を振る。ハッチが完全に閉められた時、タイガー重戦車は大通りへと姿を消していった。

「二人とも聞いたでしょう、何としてもここの噴水を死守するの！

他の場所は味方に任せれば良いから！！」

「「了解！！」」

〔なんとも馬鹿でかい車だな。アレでガールフレンド迎えに行ったら踏み潰しちまうかもな〕

「吾郎は黙ってて！　それよりユニットを穿かないと…」

一美は横倒しになったユニット固定具を引っ張り、正常な状態に戻す。その状態でようやく前に回りこみ、ユニットの全容を確認した。

「やっぱり…陸上ユニットだったのかぁ…」

一美の目の前には茶色と黄色と緑色の三色迷彩が施されたユニットが一つ、固定具の横には細長い戦車砲が装備されており、今までの扶桑が使用していた九七式中戦車・（チハ）が使用していた砲身が短い五七ミリ砲とは大きくかけ離れた武装である。固定具の周りには『Ｔｙｐｅ１－Ｍｅｄｉｕｍ－Ｔａｎｋ　（ＴＩＨＥ）』と刻印されており、どう見てもチハではない。

〔それが答えだそうだな。もうネウロイだって味方の防衛線を突破してると思うぜ？　さぁ、ここは一つ行ってみるか、相棒さんよぉ〕

アハト・アハト

「ネウロイ捕捉！！　左三十度、距離約六千！　突っ込んでくる」

「目測で距離三千になるまで発砲するな！　銃列を引き、火力を十分に引き出せ！！」

トリポリ南部を防護する外塀に集合した各国の戦車隊の内、先陣をきって定位置についたブリタニア王国陸軍第七師団のマークを持つクルセイダー巡航戦車『アールグレイ』から全車に向けネウロイ発見の報告が入る。カールスラントやブリタニア、ロマーニャやリベリオンから貸し出されたブリタニア所属の戦車達が一斉に並んでいる光景は壮観であり、また今まで互いに戦っていた仲の彼らが一つになっている光景でもある。

「でけぇ…なんて砂煙だ……」

「ネウロイにトリポリを奪われて二年、今年の初めに…ようやく奪還できたのに。ようやく普通の生活が戻ったのに…」

「なに、俺達だけで撃退できなくてもウィッチ達がいるさ。もう堕とさせない…」

遠くに見える砂煙がネウロイのあげた物だと分かり、一列横隊に展開した戦車達から動揺が聞こえる。どの車両もハッチを閉じているので発言の大半は無線によるものだ。

「小銃なんて持ってきてどうするんだお前は！！　ちゃんと木箱の中からＭＧ３４を持って来いって言っただろ！！　魔法力でも込め

て撃つつもりか！！　近くの機関銃中隊に頼み込んでルイス機関銃でも貰って来い！！」

「土嚢は三角に積め！　戦車砲の衝撃で倒れちまうぞ！！」

「一点に弾薬を集積するな！！　ネウロイの一撃でドカンだ！」

「高塀の上に配置しているＦｌａｋ１８（エイトエイト）が射撃する時には照明弾が上がる、照明弾を確認次第、耳を塞がないと鼓膜が破けちまうから気をつけろ！！」

動揺しているのは戦車兵だけではない。鉄の騎馬に群がる歩兵達もまた、トリポリを守るために精一杯の抵抗を行う準備を行っていた。たとえ、その抵抗が結果的に無駄だったとしても、ネウロイの進行を少しでも食い止めることができれば良い、自分達にできる仕事はそれ以外にないのだ。と故郷へ向けて手紙を書いてしまったのだから。

「ウィッチ部隊が準備を終えるまでが正念場だ！　気合い入れてけ！　本日は遥か東方の扶桑皇国より馳せ参じたウィッチもいるのだ！」

先ほど一美達に出会った、あのタイガー重戦車はトリポリの南門中央に堆く積まれた土嚢に車体を囲われ、その周りを更にカールスラントの三号戦車や四号戦車で囲まれている。それが意味するのは、このタイガー戦車こそトリポリ防衛の要である、厳格に言えばタイガーが備える八八ミリ対戦車砲と高塀に設置されたＦｌａｋ１８高射砲が撃ち出す徹甲弾が切り札である。他の戦車や機銃はそれらを援護する立場にしか無い。

「敵ネウロイ、Ｆｌａｋ１８の有効射程内に入りました！！　距離五千！」

高塀に配置されたブリタニアの下士官が測距儀でネウロイの姿と距離を確認する。ネウロイは丸っこい体躯をしているが、昆虫的な六本の歩行脚を器用に使い高速でトリポリへ接近している。実際にはＦｌａｋ１８の射程圏内は十キロを超えるのだが、砲角が間に合った砲が三門しかない上に連続的に射撃しなければならず、砲身の冷却も計算に入れなければならない。

となれば砲弾の威力が落ち込む事の無い、射程五千メートルより攻撃するのがベストとなる。観測報告をしたブリタニア下士官の手指示に従い、既に砲座についたカールスラントの砲撃班がそれぞれ徹甲弾を装填し、照準手が照準鏡を覗き込む。中央に配置された砲がネウロイの正面を、左右に配置された砲がそれぞれネウロイの歩行脚を狙う。

「本国から送られてきた新式の対ネウロイ用砲弾なんだ！　飛行型ネウロイ用の弾薬量を削ってまで多く送ってもらった甲斐があったぜ！…射撃準備完了！！」

準備完了を告げる照明弾が塀の上から撃ち出され、オレンジ色の煙が空へ向かい一直線に上がって行く。それを見た機関銃部隊や工兵部隊が一斉に耳を塞ぎ、耳当てを持つ者は耳当てで耳を塞いでからその上に手を置く。

「ネウロイめ、目にモノ見せてくれる。撃てぇ（Ｆｅｕｅｒ）！！」

真南の塀に置かれている第一砲座が真っ先に火を吹き、後を追うように南西の二番砲座、南東の第三砲座が射撃する。地面は砂地であったが、震動は兵士の両脚や心にビリビリと響く。三発の徹甲弾

は地面へ落ち込む事も無く、ネウロイへ向かいまっしぐらに飛んで行く。通常の弾頭より堅い鋼で鋳造された徹甲弾は三発中二発が命中、右翼の三番砲座が発射した砲弾はネウロイの直下に着弾した結果としてとても巨大な砂埃があがり、ネウロイの姿は隠れてしまった。

「どうだ！？　ネウロイに損傷は見られたか！！」

一番砲座のカールスラント砲兵将校がブリタニアの下士官に撃墜の有無を尋ねる。

「駄目です。敵ネウロイの機影を消失（ロスト）、索敵に入らせます。」

「発見は急いでくれ。各砲座は第二射の準備を進めろ、ネウロイに接近されて砲を壊されたんじゃ敵わない。西・東門の砲座担当も気を抜くな！」

無線の後、それぞれの砲座が次弾の装填を進め始めた。初弾の空薬莢を排出し、近くへ投げ捨てる。接敵中なので、どの砲も砲身の掃除を省略しているようだ。

「ネウロイ発見！！　距離約三千！　近い！！」

「こちらアールグレイ！　ネウロイとの距離が近すぎる！！　自身の砲を撃ちながら後退を開始する！！」

トリポリの前方二キロにまで進出していた『アールグレイ』の無線手が金切り声で報告する。ネウロイとの距離が二キロを切ると、長距離射程ビームを持つ大概のネウロイが攻撃を開始する距離だ。しかし、全滅したと思われるロマーニャの四九機甲部隊が撤退を考

えられる事ができたのだから、今回のネウロイはそれほどビームの射程距離が長く無いのだろう。それを確信し、手柄を焦った『アールグレイ』は他の車両より前へ進んでしまったのだ。

「あの先行したクルセイダーを援護しろ！　砂埃の中にありったけ撃ちこめ！！」

タイガー戦車の車長が車内へ叫ぶ。途端にタイガー戦車の主砲が轟音と共に砲弾を撃ち出した。それを確認したカールスラントの戦車隊は一斉に攻撃を開始する。彼等の砲声を聞いたロマーニャ軍の戦車隊が非力な砲ながら援護射撃を始める。ブリタニアの戦車も友軍を守るため必死に射撃を開始、万が一に備えて解体用工具と消火器を載せたジープのエンジンに点火もさせている。

「俺達も撃つぞ！！　第二砲座はネウロイがいると思われる空間に向け……」

双眼鏡を覗くカールスラントの砲兵将校は鏡内の砂埃中で光る赤い点を見つけた。その赤い点が何かであるのを確認する時間さえくれなかったが、彼はその点が何たるかの理解は出来ていた。

ネウロイのビームだ。あのネウロイは決して近接戦闘型では無かったのだ。飛行型に見られる典型的な直線状ビームは第二砲座に配置されたＦｌａｋ１８の砲身を横一文字に切り裂き、一瞬の内に使用不能にさせてしまったのだ。

「第二砲！　お前達はすぐに避難しろ！　後は一番と三番でやる！！」

その間にも、ネウロイの狙いは混乱している一番砲を目標に外し、初弾のミスを取り戻そうと躍起になってネウロイを撃ち続ける三番

砲へと当てられていた。

「糞！！　奴は何が重要であるのかが分かっているのか！？　だが例え我々が役立たずになろうと、まだタイガーの主砲もある！！　ウィッチがいる……そういえばウィッチの姿が見当たらないぞ！？」

カールスラントの砲兵将校が双眼鏡の向きを百八十度反転させ、レンズには街の情景を捉えるようにすると、四人の若年ウィッチが陸戦用のユニットを穿いて南門へ向かい走っているのが見えた。四人の内三人は見覚えがある三〇一装歩団の子達だと分かったが。もう一人、トサカのような赤い毛を後頭部に生やし、真っ白な羽毛が腰からはみ出しているウィッチがいた。見慣れない三色迷彩のユニットを穿き、手に軍刀拵えである扶桑刀を抱えて走っている。先ほどライヒ少佐が自らの乗車から発した無線で行っていた『扶桑のウィッチ』なのだろうか。ここ、トリポリも随分とウィッチが多くなったものだ。ノイエ・カールスラントへ無事に逃げた家族に自慢の手紙でも書いてやろうか、町の砂を詰めた瓶も同封してみようか……

カールスラント・アフリカ方面軍第二八高射砲連隊・第一中隊砲兵将校、セアド・バスナーは四人のウィッチ達に自分の娘達の面影を重ね合わせ、一瞬だが自分がかなり危険な状況だと言う事を忘れてしまった。既に第三砲座もネウロイのビームにより砲を破壊され、ネウロイは己が第三目標に割り当てた第一砲座へと照準を合わせていたのだった。

アハト・アハト（後書き）

アールグレイ
＝ベルガモットを使い柑橘類の芳香をつけた紅茶で、フレーバーティーの一種。

ロックンロール

トリポリへ迫り来る中型ネウロイを撃墜し、功を得ようとしたが為に先行し過ぎてしまい、それに危険を感じ超信地旋回で撤退していたクルセイダー巡航戦車『アールグレイ』の最大速度は凡そ時速四十四キロ、それをビームも撃たずに追いかけるネウロイは今までより格段に速度をあげており、ざっと時速六十キロ程度だろう。相対速度が時速一六キロでは振り切れる余裕も無い、闇雲に撃ち続けていた四十ミリ主砲も有効弾を出していない内に、ネウロイはいとも簡単にアールグレイを腹下に捉えたのだった。

「何だ！？　味方の援護が止んだぞ！？　停車させろ！！」

皮製の飛行帽を被り、金髪を隠している車長兼装填手のブリタニア戦車兵はアールグレイの特徴的な造型を持つ砲塔の左正面に備え付けられた物見窓でトリポリの高塀を見て隣の射手兼無線士へ伝える。彼らは遂に味方が自分達を見捨てたのだと思っていたが、本当は違った。戦車隊は彼らを援護しようにもネウロイとの距離がほぼ一緒である。旧式である時限信管式の対ネウロイ散弾しか搭載していない車両は少なくなく、今それを撃ち込んでは必ずアールグレイにも損傷が出てしまう。

幸いネウロイの動きは停止しており、塀下の兵士達は思わず土嚢から顔を上げ、其々の戦車長も砲塔のハッチを開け、双眼鏡でアールグレイの観察をしていた。

「馬鹿野朗！！　奴は真上だ！　早く走れ！！」

アールグレイの無線機に幾つもの声が発進を急がせる旨の通信を飛ばしている。スピーカーから漏れた声を聞いた運転手が車長の命

令を無視し、前進用のレバーを倒しギアを一段階に掛けたがアールグレイは発進しなかった。

「車長！！　ラジエーターに破損あり！　エンジンルーム内に冷却液が漏れています！！　エンジンの熱が下がるまで発進できません！！」

「なんてこった！！　これじゃどうにもできんぞ！！」

液冷エンジンの短所がここで現れることになろうとは、彼らにとっても予想外だった筈だ。そのくせ真昼のトリポリはたとえ沿岸部だろうと塀を越えれば灼熱の大地が広がるのだ。そのような土地でエンジンの冷却を待つのは酔狂である、しかも実際にしようものなら確実に日が暮れる。

「まずい、もう構わん！！　各自徹甲弾をネウロイに撃ち込め！！」

タイガー重戦車の車長であるライヒ少佐が右手で前方の鉄塊二つを指差し、砲撃指示を仰ぐ。しかしどの戦車も砲撃を開始しない、周囲の四号戦車や三号戦車すらもだ。

「どうした！　なぜ撃たない！？」

ライヒは皆の行動を理解するのにそれほど時間はかからなかった。ブリタニアの戦車隊が受け持つ列から一台のウィリス・ジープがネウロイに向け飛び出していったのだ。ライヒは命知らずなジープの存在に驚いたが、双眼鏡で搭乗者を確認して更に驚いていた。

「こりゃたまげた。魔女が箒じゃなくて、鉄の馬に乗ってるとはな。」

「もっとスピード出ないの！？　今ネウロイに撃たれたら一網打尽だよ！！」

金色の髪から生える真っ白な毛に覆われた耳をたなびかせたサンドラは走行中であるジープの助手席から危なく立ち上がり、構えているブレダ機関銃の照準をネウロイに合わせ引き金を引く。魔力が込められた銃弾は数発がネウロイの胴体に命中、戦車砲で作った窪み以上に大きな窪みを作ったが、コアに至るまではとても遠い。

「大丈夫よ！　私達にはシールドがあるんだから！！」

運転席に座っているルチアは角ばった三角状の耳を頭に生やしている。ジープのアクセルを踏みやすくするためユニットを足から外し、そのユニットを荷台に座る一美に持たせている。

「この…ユニット…すごく重いです……」

左手を使い、荷台に置かれたルチアのユニットを押さえつけ、膝立ちの状態でジープの荷台に座っている一美。サンドラと同じく、自身のユニットである一式中戦車を穿いたまま乗車しているのでジープの重心は少し後方に移動している。これもジープのスピードが上がらない要因だろう。

「ネウロイ、行動を再開！　脚が動いています！！」

トリポリの高塀に残る砲は遂に第一砲座のみとなり、他の砲座に

は人影も見られない。それにウィッチが迎撃に駆けつけたのならもうＦｌａｋ１８を使用する必要もないのだ。これにより第一砲座操作員も半数が撤収、バスナー大尉を含む数人が塀の上に残り、ネウロイと三人のウィッチを眺めていた。

「彼女達にジープを貸し出すなんて、ブリタニアも良い事するんだな」

双眼鏡に写るジープの車体に描かれたブリタニア王国陸軍の紋章を見ながら隣で直立するブリタニアの下士官に顔を向ける。彼もまた双眼鏡を覗いていたが、表情は脅えきっている。

「ネウロイ…こっち向いてる…なんかやばくないですか…」

「大丈夫だ！　ウィッチさえ来てくれれば俺達が標的になるなんてこと…」

大尉は今までに見てきたウィッチ達と彼女達を対等に見ていた。一度はネウロイに占領されたトリポリを奪還するために借り出された航空ウィッチ達の動きは目覚しい物であり、自分達は後方から市街の確保にあたるだけで良かったのだ。しかし、ジープに乗る彼女達には数百メートルも離れた塀を防御出来るほどのシールド張る余裕は無かった。

「撃った！？」

「何で私達の方を撃たないの！？」

ネウロイの頭部に当たる球体から集束して放たれたビームはジープの右上空を突き抜け、塀へ一直線に飛んで行く。あと数秒で第一

砲座のＦｌａｋ１８を撃ち抜き、周囲の砲兵も蒸発させんとした瞬間、バスナー大尉達の目の前に小さいながら青白い円盤が出現した。その円盤はネウロイが水平に放った赤いビームを九十度上空に跳ね返し、ビームはアフリカの霞がない綺麗な青空へと消えていった。

「やったね！！　この距離で遠隔発動できたのは新記録だよ！！」

一瞬の出来事に第一砲座の兵士達は動揺し、ブリタニアの下士官に至っては腰のホルスターからブローニング・ハイパワーを引き抜き、そのまま明後日の方向に放り投げる程のパニックに陥っていた。唯一、塀の下から聞こえた声を聞き取れたバスナー大尉が欄干に身を乗せ下を覗くと、一人のウィッチがとても嬉しそうにはしゃいでいるのが見えた。彼女は噴水の方面から走ってきた四人とはまた違う、とても顔馴染みのウィッチだった。

「マリア中尉！！　今のはやっぱりアナタでしたか！！　助かりましたよ！！」

塀の下に向け声をかけると、そのウィッチはポニーテールに留めた栗色の髪を陽に照らして大尉へ手を振る。マリアの右腕には五角形の防盾が取り付けられた砲が握られており、両脚には従来のリベリオン正規品であるユニット・Ｍ４中戦車が持つ流線的な装甲ではなく、直線的な装甲をもっている。そんなとても真新しい新型ユニットを穿いている上機嫌なマリアの後ろからは何人ものウィッチが歩いてくる。彼女達の先頭に立つ茶髪のロングヘアーを肩まで垂らしたウィッチはカールスラント陸軍が採用している砂色の士官服の上着のみを着、足には明るいブラウン色をしたユニットを穿いている。しかし手に持つ武器は大砲のような武器ではなく、小さな短機関銃が一丁のみである。

「第三〇九統合戦闘装甲兵団・ローリングウィッチーズ隊長のミヒル・エイトリン大尉以下九名、只今帰って参りました！！　って私より前へ出るなお前ら！！」

碧い瞳を持った人形のような美しい顔立ちとは似合わない野太い声でそう叫ぶミヒルを尻目に、部下である八人の武装をしたウィッチ達が我先にと土嚢へ辿り着き兵士達から双眼鏡を引っ手繰る。

「いたいた！！　あの子が新入りですか！？」

「随分と大仰な装備してるじゃないか。こりゃ改造のし甲斐がありますね」

「あのぉ…なんで皆様は援護しないのですか？　あそこに私達三〇一の人もいるのに…」

彼女達は口々に一美の印象について話し始めるが、一向に援護をしようとはしない。

「エトナ、あいつらが舞い上げた砂埃が目に入った私の代わりに補充員の姿を見てくれ…あいつら…補充員が初撃墜終えた後には覚えてろよ…」

先ほどまでの威勢良い声色も何処かへ消え、ミヒルは必死に両目を擦っている。彼女の隣には、薄い緑色の軍服を着た少女が単眼鏡を覗き込んでいる。

「うん。あれだけ質量がありそうなら“投げる”のに適してそうね。ミヒル」

「そう言うことはいいから、そう言うことはいいから。補充員がネウロイを破壊したら呼んできて、私はちょっと井戸まで行ってくる…あいつらが援護に飛び出さないように見張ってて、痛てて…」

ミヒルは弱弱しくそう吐き捨て、道に散らばるトマトをストライカーユニットで踏み潰しながら路地へと消え、残されたエトナは艶のある銀髪を手で弄りながら溜息をつき、部下達のいる土嚢へと歩き始めた。

「ちょっとアンタ！！　ちゃんと撃ってる！？」

一美とサンドラ・ルチアは既にジープを乗り捨て、別々に走りながらゆっくりと歩行するネウロイへ肉薄していた。三人は一点に固まらずに行動するよう事前に決めているようである。三〇一の二人はジグザグに走りながら攻撃を加えているものの、一美はジープの傍から離れようとしなかった。

「だ…だって…実戦なんて初めてだし…ネウロイなんて間近で見たのは初めてだよぉ…」

〔俺も見るのは初めてだ…正直これは引くぜ…やっぱりクロスホエンから飛び出すモンじゃあ無いな…〕

その通り、周囲を海に囲われた扶桑国にはネウロイが襲来する事例が極端に少ないのである。ネウロイは山脈や海洋を嫌うので、世界にはそれを防衛線に利用している国も少なくは無い。そんな扶桑国の陸軍学校から半ば強制的に転属させられた未熟なウィッチがネウロイと交戦経験があるはずも無い。これは仕方が無い事でもあるだろう。使い魔でさえ微妙に怖がっているようだ。

「いいから！　早く撃ちなさい！！　アンタの武器が一番威力ありそうなんだから！！」

サンドラは左腰にマウントされた三七ミリ砲をネウロイに向け撃ち込むも、決定打にはならない。

「私達だってこんなでかいネウロイと戦った事なんてないんだから…きゃあ！！」

ルチアは両手に持つブレダをネウロイの腹部に当たる部位に向け連射を続けていたのが災いしたか、ネウロイのビームがルチアへ向けて撃ち出された。ルチアはユニットによって増幅されたシールドを張り難を逃れたが、押されているのは確実だ。

〔このまま負け犬になるのは好きじゃないな。俺が火器の管制をやってやるから、さっさと荷台の砲を取れ〕

「う…うん！」

左手に握られた扶桑刀から聞こえる吾郎の指示に従い、一美はジープの荷台に載せられた四七ミリ砲を手に取る。今までは航空歩兵用の軽機関銃しか扱った事しかなく、案の定に一美は砲を水平に保つ事にも苦労しているようだ。

〔飛行型でも地上型でも、コアさえ狙えばゲームセットだ。奴にはコンテニュー権さえ残っていないんだ、さっさとやっちまおうぜ〕

今度は吾郎の声に無言で頷き、ジープのボンネットに自らの右ひじを乗せ、右腕に握った砲を安定させる。砲に備え付けられた照準

鏡を覗き込み、ネウロイの頭部を十字線に捉える。その瞬間、引き金に指もかけていない砲から勢い良く砲弾が飛び出していったのだった。

ロックンロール（後書き）

なんかグダってます…

空を飛べなくても

多々ある種類の銃弾にしろ砲弾にしろ、この世ではたった三つに分類できる、目標に当たった弾と当たらなかった弾、目標に当てなければいけない弾だ。前者は銃を射撃し是を遂行することによって、今日を生きるのに必死でウィンチェスター銃を持って走り回る猟師なら今夜のメインディッシュを獲得し、警察官ならスナッブノーズ（獅子っ鼻）な回転拳銃で中心に穴をポッカリと撃ち抜いた標的紙を同僚に自慢し、スプリングフィールド小銃で二十ヤードの標的を狙う新兵なら上官に後ろからケツを蹴られなくて済む。もし彼らが標的に撃つ弾を外してしまったら？　猟師なら今夜の夕食が質素になって家族に怒られるし、警官なら同僚に茶化され金輪際ネタにされる、新兵なら上官にケツを蹴り飛ばされた上にグラウンド二周の罰を貰うだろう。

では、当てなければいけない弾とは何なのだろうか。それは戦車から撃たれる砲弾が代表となるだろう。今日に於ける戦車戦では、初弾を必ず命中させるのが大切となる。敵に出会った時、初弾を外してしまうと敵が戦車なら反撃のチャンスを与えてしまうし、対戦車兵の集団なら後は神に祈るしかないだろう。何にせよ、物事を首尾良くこなすには早い内が良い。

ネウロイに向け放った徹甲弾はいとも容易く頭部にあたるバルーン状の球体に大きな穴を穿った。ゴルフボールほどの大きさになった穴の奥からは小さな空が見え隠れしている。

「当たった！！　この勢いなら勝てる！」

〔牽制成功で浮かれるのも良いが…あいつの狙いは完全に俺達へ移

行したようだな…さぁどうする？　お友達〕

ネウロイが持つ自然治癒装甲により一美が開けた穴も数秒後には跡形すら残っていなかったが、一美は確かな手応えを感じていた。

「決まってるでしょ！！　コアがある場所を探して、一気に弾を撃ち込むの！　教科書通り、まずはネウロイの広範囲を削れる弾が必要だけど…飛行隊みたいに散弾銃使用者がいる訳無いし…」

訓練生時に読んだ教科書通りに奇襲戦闘を行えば必ずネウロイに勝利できる。そう教官に言われたことを思い出したのだ。後は彼女が覚えている限りの戦闘法で戦えば良い。

〔良しわかった。直ぐに物陰に隠れてくれ…榴弾が有るからそいつで代用出来ないか？〕

腰に提げたカーキ色の鞘に納められた九五式軍刀から吾郎が指示を出し、ネウロイに突進する一美を一旦ジープの影に隠れさせる、一美の動きが十分に静止した後、四七ミリ砲に装填されている砲弾が徹甲弾から榴弾へ『ジャコン』と湿った金属音と共に切り替わる。幸いにもネウロイは頭部に攻撃を受けた事は認識していても、一美の存在には全く気づいていないようだった。ネウロイに見えているのは稼動不能となった戦車から乗員三名を救出しているウィッチ二名だけらしい。そして戦車兵達は最優先攻撃対象にもなっていない。これでネウロイの狙いがトリポリに到達する事だと言う事がわかる。

一美はジープに載せられていたブリタニア陸軍の鍋みたいな鉄帽を拝借し、それを頭に被る。胸当てや腰板を装着してこなかったのは誤算だったが、どうにか頭の防護だけはすることが出来た。

〔オーケイ、ヤツはこっちにノーマークだ。仕掛けにいこうぜ〕

「よし…やらなきゃ…いつかはこうなる時がくるんだから…それが偶々今日だっただけ…」

そう小声で自分に言い聞かせてからジープの影から颯爽と飛び出し、ネウロイの四角い胴体に四七ミリ砲を向ける。引き金を右手の人差し指で引いた瞬間、低く唸る砲口から榴弾が放たれた。榴弾はネウロイの胴体に命中、着弾点を中心に浅い窪みを作り上げる。ネウロイにとっては予想外の攻撃だった。まさか自分の真下に敵がいるとは思わなかったのだから。

「見つけた！！　頭と胴体のつなぎ目だ！！　榴弾から徹甲弾に変更！　一気にぶっ放すよ！！」

〔そいつは問題なし。ヤツの脳波を水平線（フラットライン）させてやれ〕

榴弾の破片によってネウロイの表皮が剥がれた時、頭部と胴体の間で僅かに光る箇所があることを一美は見流さなかった。すぐさま砲を構えなおし、第二射を放つ。

鋼鉄製の徹甲弾は少し狙いが逸れ、ネウロイの頭部にまた命中した。これには流石にネウロイも目標を変更したらしく、頭部の球体を捻って一美を探し始めた。ネウロイとの距離はほんの十数メートル、一美は簡単に捕捉された。

「（まずい…シールドの張り方を忘れちゃった……どうしよう…）」

ネウロイは一美がいる方向に向き直り、表皮上に配置された幾つものレーザー発射補助機から頭部の先端めがけて細いレーザーを収束させる。集められた光が空に放たれた時には、彼女も跡形も残らないだろう。　そんなレーザーが目の前から向かってくると思った

一美は腰を抜かしてしまった。

「こんな時、教官ならどうしたのかな…」

一美が地面にへたり込み、腰を抜かしてから数秒が経った。ネウロイもビームを連射しすぎたせいか、次弾に時間が掛かるようだった。

「教官…中尉…やっぱり自分には軍人なんて無理だったんです…生意気ばっかり言ってごめんなさい…起床時間より早く起きて物音たててごめんなさい…あと迷宮入りした教官のズボンが洗濯中に無くなった事件の犯人は…」

何とも微妙な走馬灯が駆け巡る一美の耳に電子的な雑音が入る。どこかの無線とインカムが接続された合図なのだが、それが一美を現実に引きもどす景気にもなった。

「すいません、それ私が犯……」

誰も得しない自白が終わりきる前に一美のインカムへ通信が入る。

《頭の中で壁を作れ！！　それを自分の前に突き出すイメージだ！！》

低いながらも綺麗な声でそう指示がなされる。その瞬間、一美は両腕を前に出し、頭の中で目の前に大きな壁があると思い込む。そうすると一美の目の前に半径四メートル程の青白いシールドが出現したのだ。

「はい！　できました！（その言葉…教官も同じ事を言ってた気が

する。誰なんだろう…）」

その瞬間、ネウロイから真っ赤なビームが放たれたが、一美のシールドにあっさり跳ね返された。一美はその場から微動だにしない事から、ルチアが張ったシールドより大きさも強度も卓越しているようだ。

《よぉし！　そいつはビーム発射から次弾発射まで時間がかかる、一気にカタをつけろ！！　やれるか！？》

通信の向こう側では兵士や住民の歓声も聞こえてくる。皆が共通語のブリタニア語ではなく、故郷の言語で自分を応援してくれている。その事が一美のネウロイに対する恐怖心を払拭した。

「はい！！　やれます！！」

ネウロイの真正面に立った一美は右手に携えた四七ミリ砲をネウロイの頭部と胴体部に向け、狙いを合わせる。思いのほか手ブレが無いのは吾郎が補正を加えているのだろう。十分に気持ちを静めてから引き金を引く。徹甲弾を迎え入れるネウロイも自身の最後を感じ取ったのか、徹甲弾がネウロイのコアを砕く瞬間までも回避行動を一つもとらなかった。

コアが砕かれた音と共にネウロイの全身は無数の光る粉となって地面に降り注ぐ。一美は右手に持つ戦車砲を砂地に放り、呆然と空を見上げている。

「空を飛ばなくても…守れる物はあるんだね…」

ベルトに提げた軍刀の柄を握る左手が震える、鞘と刀身がぶつかり合いカタカタと小さな音が鳴る。左手に釣られて上着の裾を掴ん

でいた右手も震え始めた。一美は我慢していた恐怖心を解放したようだ。
《初戦闘で初撃墜とは…しかも中型ネウロイだぞ…流石は扶桑のウィッチって事か…マリア！　あいつを回収しに行くぞ！　あの勢いならすぐに寝ちまう！》

インカムから聴こえる声は次第に遠くなる、一美はミヒルが予想した通り、空を見上げたまま背中から倒れ、暖かい砂のベッドの上にそっと目を閉じた。

アフリカの雷鳴

「ん…ここは…？　今まで砂の上に寝てたのに、なんかお尻がフカフカする…」

瞼を貫通して目を刺激する眩しい光に一美は夢の中から覚める。ぼやけた視界で辺りを見回してみる、壁には扶桑では滅多に見られない綺麗な格子ガラスが嵌め込まれ、そこからオレンジ色の陽光が差す。　フローリングの床には飴色のニスが満遍なく塗られている。　天井だけはひび割れが多かったが、現在自分がいるのは高級士官が使うような部屋であり、また寝ていたベッドもスプリングが上質な物だ。

「お…起きたか。　ざっと3時間17分8秒、私のベッドを部下に占領された時間では新記録だな」　声の主はネウロイとの戦闘時に聴こえた声と声色が似ているし、そしてベッドの持ち主とだけはわかる。机をよく見ると先程は見逃していた人影があった。夕日に照らされ美しく光る茶髪の凛凛しい顔立ちをしたカールスラント人、一美にとっては本物のカールスラント人を見るのは初めてだった。

「『カールスラント人を見るのは初めて』って顔をしているな。私はカールスラント陸軍のミヒル・エイトリン特務大尉だ。明日から君の上官であり、第309統合戦闘機械化装甲団の一員になる。まぁ肩の力を抜きなって、誰かを呼ぶときには階級も不要だぞ」

ここで言う特務大尉はウィッチが戦闘要員として統合戦闘団に所

属中まで適用される特殊な階級だ。
　この制度は国によって度合いが異なり、例えば扶桑陸軍の特務階級であれば本来の階級から一段階上の権限、例えば特務曹長なら准尉か少尉相当の権限が与えられる。ミヒルの場合、カールスラント陸軍だと二階級上の権限、特務大尉なら中佐相当の権限が与えられる事となる。

「とりあえず、その鞄に入ってる辞令を渡してくれ。この書類に写しを取らなきゃいかなくてな…ほら」

　ミヒルは机の下に落ちている雑嚢を拾い上げ、一美が乗るベッドの上にドサと投げる。一美は慣れた手つきで言われたとおりに雑嚢を開き、茶封筒に入った転属辞令書をミヒルに手渡そうと腕を伸ばす。

「……！？」一美は腕を伸ばし、封筒を渡しかけてから事の全容に気づく。

――――――――――――ちょっと待て　と一美は心の中で囁いてみる。

　もしもこの辞令を渡してしまえば、自分は正式にこの油と砂と煤がお友達な陸亀部隊の一員になってしまう。闘う事で誰かを救えるならそれでも構わないのだが、故郷には『立派な航空ウィッチになります！』と言って汽車に乗ってしまったのだから嘘は付けない。

「お…おい…指離しても…良いんだぞ？？」

緊張のあまり一美の握る力が上がり、少しの間ミヒルと一美は封筒を使った一進一退の攻防を行っていた。

「いいから寄越せ！　原隊が航空隊なら飛行型ストライカーユニットを上申してやるから！！」

ミヒルは空いていた左手で一美の頭をバシッと叩く。その拍子で封筒から一美の両手がすっぽ抜け、辞令が入った封筒はミヒルの手元に。

「ふむ。事前連絡では名前と階級だけしか分からなかったが、取りあえず原隊は立川飛行場の訓練学校のまま…同期生が卒業するまでは原隊も無し、ってとこか。ハハハ、残念だったな」

封筒から取り出した紙に刷られている文字をスラスラと読みながら手元の書類に要項を書き写す。

「隊長…いやミヒルさん？　どうして扶桑の文字を読めるんですか？？」

「ん？　あぁ…これには別に深くない訳があるんだが…まぁ今は教

えなくてもいいだろう。人間、隠し事の一つや二つ有った方が生き生きするのさ。もうすぐ夕食の時間だから食堂で皆に挨拶しな」書類の束を片付けたミヒルが机から立ち上がる。

電気スタンドのスイッチを切ってから一美をベッドから引き摺り下ろす。まだ歩きが覚束無い一美の両肩を右腕で包み込み、部屋を出た先にある食堂へ誘導してやる。裸電球が幾つも釣り下がり、ある程度の明るさがある食堂では既に夕食の準備が完了しており、全隊員も集合しているようだ。

「よーし、みんな良く聞け。今日から我が三〇九に配属されることになった隊員を紹介する。ネウロイ侵攻時に現場へ到着した際、砂埃を巻き上げて私の視界を奪ってまでして姿だけは見た者もいるようだが、名前を知ってるのはマリア中尉と私ぐらいだ。自己紹介にもう一回は無いぞ、耳の穴かっぽじって良く聞いておけ！！」

ほら、とミヒルに背中を押され、四人ずつ掛けている二つのテーブルの真ん中に一美は立たされる。

「えぇ…っと…竹西…一美です。扶桑陸軍の軍曹で年齢は十三歳…まだ陸戦ユニットも上手く扱えませんが、みなさんの足手まといにならないように精一杯頑張ります！！」

「足手まとい…ねぇ」そんな声がテーブルの周りから聞こえてくる。

「取りあえず、座る場所はどこでもいいからな。数週間すればテーブルを作り変えてもらうよ」

一美が空席を探していると、マリア中尉が忙しく手招きをしているのが見えたので近づいてみる。案の定、隣に座れと言われたので命令に従う事にする。

「初出撃で初撃墜とは凄いなぁ～お前は。私なんて三回目の出撃でようやく初撃墜だったのにな～」

マリアは自らの配膳トレーに置いてあったゆで卵を一美の座っていた場所にあるトレーに置く。一美の夕食にはゆで卵が一つ増えた。ここで一美は自分の配膳トレーを見てみると、いかにも堅そうなパンが一つに、近くの地面で抜いてきたような草を炒めた物が盛られた皿が一つ、どれもこれも到底食べられた物では無さそうだ。強いて言うなら主皿である『鯛のような魚』が塩焼きにされているのが美味しそうなだけだった。

「一美の目の前にいるのがヘレーネ・ソルヴェーグ中尉、隊長と同じカールスラントの出身だよ。部隊の支援全般をやってくれる、今日の食事もヘレーネの担当だよ」

トレーを視界から外し、今度は目の前を見てみる。一美の向かい側にはミヒルと同じ砂色の制服を纏った黒髪の少女が座っていた。ミヒルより大人しそうな顔作り、家事ならそつなくこなしそうだが、料理は不得手に見えた。

「貴女が新人さん？　今日の戦闘は見てたわよ、褒美に私特製『野草の炒め物』、サービスしてあげるわ♪」

一美の配膳トレーにもう一つの皿『野草盛り』が増える、自分のトレーにあった野草とは明らかに種類が違う。本当に食べられるの

かが疑問である。

「この料理、ヘレーネさんが作ったんですか！？」一美は野草に顔を近付ける。

「そうだよ～。味見はしてないけど…多分美味しいわよ。」多分、と自ら言ってしまう。

冗談じゃない。一美は心の中でそう呟いた。

「んで、向かって左奥…ヘレーネの隣がアリシア・ビエナット曹長だ。部隊の出来事を映像記録として残してくれる」

「君は服装から見て扶桑出身だろ？　やっぱり扶桑の映画は凄いよなぁ～。役者といい演出といいカメラワークといいどれも一級品だよ！　まぁリベリオンも負けてないがねぇ～、そんでこれはお近づきの印だ！！」

アリシアの人形のような細く白い腕から堅パンが放たれ、テーブルを滑りながら一美のトレーにぶつかり静止する。ここまで来ると彼女等の魂胆が眼に見えてきた。

「あっちのテーブルにいるのは…右から、オルガ・ロンカイネン曹長　シャロン・タルファッロ中尉　ロゼ・マートリン少尉　クリス・ロンザプトン少尉　レイ・ソランジュ曹長かな。あと隊長の隣にいるのがエトナ・アンダルシア少佐、部隊の軍事顧問だ。」

後ろを振り向いてもう一つのテーブルを見ると、数人が食事を止めてまで此方を見返し、手を振ったり笑い返したりしてくれた。まるで良いように罠に掛けられた鶏を哀れむような目で。

「まぁ今日は疲れたろ？　いっぱい食べて大きくなるんだよ～♪」マリアが魚に手をつけながら笑う。

「は…はい…」震える手で木製のフォークを手に取り、二倍に増えた野草盛りを掬い上げる。

未だ誰も手を付けていないらしく、一美の行動に全隊員が見入っている。口に運ぼうとすれば皆が力み、躊躇うと更に力んでいる。

「（南無三！！！！）」目を瞑り、少し焦げ気味な野草を口に放り込む。

二~三回咀嚼してみると、やはり苦い。フォークを置き、右手で口を押さえてからテーブルに置いてある筈の水を探す。しかし、どこを探しても水は無い。

「おいおい、今日は水が無いのか？」マリアがようやく異変に気づいた。

「ごめんなさいね。今日も井戸は枯れてたし、定期補給日は明日なのよ。」ヘレーネがくすくすと笑いながら魚の肉を小分けにしている。

「あ～あ。このままじゃ地獄だな、毒見役ご苦労様～」ゆで卵の殻を剥き、テーブル中央の岩塩に銃剣を突き立てているアリシアも笑う。

「み…水…」苦い液体が喉を伝わり食道に到達し、遂に一美は限界を迎える。席を立ち、井戸と見られる四隅をコンクリートで固めた

穴めがけて歩こうとする。しかし思うように足が動かない。草に毒でも入っていたのか、凄く膝が痙攣するのだ。

「うぐぇ！！」一美は床に両膝をつき、そのまま前へ倒れて強く頭を打つ。腰だけが床についておらずとてもだらしが無い。

「おい！！　ヘレーネ担当日に久しぶりの犠牲者だ！！　食費の予算を削った罰が下ったらしいな！」

食堂の空気は険悪緊張が続くようではなく、まるで毒当たりした新人を見て楽しんでいるように…正確には楽しんでいるといって過言ではないだろう。一美は薄れ行く意識の中で、この部隊はある意味ネウロイより末恐ろしいのだと思った。

――――こうして、扶桑陸軍に籍を置いている竹西・一美軍曹は正式に第三〇九統合戦闘機械化装甲団『ローリングウィッチーズ』に配属されたのだった。

「おい起きろ、もう午前の訓練が始まってる時間だぞ？」

「訓練！？　遅れたら大変だ！」

耳に入れるだけで嫌な言葉を聞いた一美が銃声を聞いた水鳥のように隊員用ベッドから飛び起きる。ベッドのスプリングを軋ませ、ボロボロの毛布から顔を出すと目の前にマリアが座っていた。

「そんな訓練が嫌なのか？　まぁ一美は午後の訓練から参加すれば良いからな。私は一美が目を覚まし次第、隊長室に呼んでくれと隊長に言われたから…ほら立って」

一美は言われるがままに立ち上がると、マリアは一美の乱れた制服を正し始めた。

「どうしたんですか？　急に」

順番を違えた制服のボタンを修正されている一美が苦しそうに質問する。

「あなたに来客だよ。どうしても一美に会いたい人がいるんだってさ」

「来客？　私は昨日ここに着いたばっかりだから…挨拶廻りとかですか？」

「そんな事はしないよ…これで完成だ！」外れかけた肩章を留め、一美の両肩をポンと叩く。

一美はまるで『新品の制服を着て戦争ごっこに興じる女学生』と言った出で立ちだ。昨夜に野草の毒に当たって倒れた形跡は微塵も見当たらないだろう。

寝起き特有である足の震えが抜け切っていない一美をミヒル隊長の部屋まで連れて来たマリアは「私も訓練に参加しないと」と言って、兵舎に隣接された武器庫へ訓練用の道具を取りに消えてしまった。少しだけ開いた扉を押すと、まず目に入ったのは隊長だった。

彼女は部屋の真ん中にあるソファに座り、低いテーブルに置かれた籠の果物（きっと一美に贈られた物だ）を躊躇いも無く食べている。そして見知らぬ男性が一人、向かいのソファに座り、ミヒルと話していた。二人の奥には三つの丸椅子にちょこんと座る三人の少女、こちらは見覚えのある小奇麗な黒シャツを身に着け、その袖には第三〇一統合戦闘装甲団の腕章『履帯を全身に巻きつけた木乃伊（ミイラ）』が縫い付けられていた。

「遅いぞ一美！　上官をどれだけ待たせたと思っている。罰として果物の籠盛りから林檎を除外させてもらう！！」ミヒルは籠に手を伸ばし、その中に入っている色の薄い林檎を取り出す。

きっと自分が食べたいだけだろう、と心の内で呟く一美にはそんな事もどうでも良いようだ。テーブルの果物よりも、やはり男の存在が気になるようだった。海のように青い瞳としっかりした目鼻立ち、片手には鷹の羽が付いた帽子を持っている。

「この方はフランキ・マツェーニ中尉だ。ロマーニャ軍アフリカ方面軍所属第四九機甲中隊の指揮官を任されている…」

「お会いできて嬉しいよ、竹西軍曹。貴女たちトリポリの部隊がネ

ウロイの気を引いていなかったら、我が部隊はネウロイに一人残らず殲滅されていたところだ。我々が救出に向かった第三〇五部隊も無事じゃなかった筈だ。本当に感謝しているよ」

サブリナ軍曹が背負っていた無線機から聞こえた男の声だ――そう思った一美は丸椅子に座り、あの時に無線機を背負っていたサブリナをちらと見、また視線をフランキに戻す。

「昨日の夕方、アレクサンドリア補給基地に中尉の部隊と三〇五部隊が到着したとトリポリの電信室が連絡を受けたんだ。損失した乗員と車両はアリエテ戦車師団やブリタニアの歩兵戦車隊とかから補充されるらしい。それに連合軍アフリカ本部からの通達で最終的にはアレクサンドリアの防衛隊に編入されることになったんだってな。」バインダーに挟まれた紙に刻されたタイプ文字の要点だけを読み上げるミヒル。

「ええ…編入は早くて明日、遅くても二日後になると思います。だから、まだ自分が指揮官でいる間に竹西軍曹へお礼を言いに来たのです…」

「では用件は済ませたな、マツェーニ中尉。ほら、次はお前達だ」

「は…はい」三〇一部隊の三人が椅子から立ち上がり、一美の前まで歩み寄る。

「まぁ、昨日は悪かったわよ…戦車兵の救助を優先してアンタだけ置いて逃げた事はね」

恥ずかしそうにそっぽを向いて話すサンドラ。

「実戦も、他隊との合同行動も私達は初めてだったのよ。今回の責任は私の減俸で丸く収まったから心配しないで」

三人の中で一番の年長者であるルチアがゴムで束ねられた始末書を一美に見せつける。

「私達の部隊長が外出中だから…訓練を抜け出して謝りに来たの。その果物籠は私の家から送られてきた物なんだけど、どうか頂いてください」

少し黄色味を帯びたローカットの靴下を穿く他の二人とは違い、高価そうな刺繍が施された純白のニーソックスを穿いているタチアナを見た一美は彼女が裕福な家の出身だろうかと思考を巡らせる。

「あ～その、昨日の夜にお前らの隊長と話したが…今日の訓練には参加しなくて良いみたいだぞ？　その代わり、竹西軍曹にトリポリ市内を三人で案内してやってくれ。　正午には我々の部隊から迎えを出すからな。」

一度ネウロイが出没すると、再出没するまでの数日間だけだが小さな平和が訪れる。取り分け戦闘の翌日はウィッチ達の安息日でもある。

「では大尉どの、竹西軍曹をお借りします」

ドアの手前で鍔無しの略帽を被り直したルチア曹長がミヒルに対して敬礼を行う。それを見たミヒルは食べかけの林檎をテーブルに置いてから、返礼。

彼女に続いて、タチアナとサンドラが部屋を出る。サンドラの腕はいつの間にやら一美の腕をがっしりと掴んでいた。一美は抵抗し

ているのか、ズルズルと引き摺られながら隊長室を後にしたのだった。

――――――――「そういえば、アナタの名前を聞いてなかったね。なんて言うの？」

隊舎の入り口正面に駐車されたジープ（ルチア達が昨日の混乱に乗じて掻っ払ったモノ）のエンジンが力強く唸る。その音に混じり聞こえた声は運転席に座ったルチアの物であり、一美は助手席に収まっていた。

「あ…竹西一美…です」

「へぇ～、キレイな名前をしてるじゃない。扶桑のウィッチなんて本物を見るのは初めてだよ。扶桑人形なら持ってるんだけどね」

「ねぇサンドラ、その人形はフィール中尉が私にくれた物じゃない？」

「マリア中尉の親が手紙と一緒に扶桑人形を送ってくる時があるの。父親が扶桑ウィッチの熱狂的なファンでね。でも置き場所に困ると私達にくれたりするんだよ」

「ほぇ～扶桑人形がアフリカにもあるだなんて驚きですよ～」

実家にあった人形なんてモノは木彫りの熊程度しか無かったし、扶桑人形なんて大層なものは立川飛行場の学校にいた時も休暇で都心へ行った時に見たぐらいである。『坂本美緒』の人形が一番安かったが（失礼だが）、それでもウン百円の代物だ。そんな人形をド

カ買いする海外の富豪とは…一美はある種の恐怖を覚えていた。世界は想像以上に広いなあ、ギラギラと照りつけるアフリカの太陽光に額を濡らせながら一人ごちる一美であった。

より良い一日を

「これおいしいですね～。なんの肉なんですか？」　トリポリ市街のマーケット通りに店を構えるレストラン『ロックブレイカー・キャメルミート』の屋外席に座る四人の若年ウィッチ。その中で唯一、服装の違う黒髪のウィッチが皿に盛られたやや大きめな肉を頬張っていた。　焦げ一つない茶けた焼き色を持った肉はナイフを筋に添って力強く動かす必要があったが、比較的簡単に切り分けることができた。
見た目は豚肉と言うより牛肉に近いが、脂身の量は鶏肉のそれに近い、不思議な味だ。

「それラクダの肉だよ、食べたこと無いの？」

反抗的な態度で質問に答えるルチアは、持っている書類に鉛筆で事細かに何かを書き込んでいる。一美が質問すると、これは昨日の戦いを司令部に報告する書類を書くための準備で、当時の状況などを時間経過を軸に記録しているのだそうだ。早く書かなきゃ記憶が曖昧になってしまう、だから「今」書いているのだ。

「動物園とかで見たことないの？　それとも扶桑には動物園が・・・あれ？　バネどこやったっけ…？」

ラクダの肉が置いてある皿の目の前でベレッタ自動拳銃の分解清掃をするサンドラ。こちらは昨日の戦闘で拳銃を落としてしまい、内部に砂が入ってしまったんだと言っていた。食事の席で機械油まみれの汚いパーツを弄る事には一美も抵抗が無かった。ストライカーユニットの組み立て教練が最後まで終われず、泣く泣く格納庫で食事をしていたのは訓練生時代でもよくあったのだ。そんな事より、

一度地面に落としただけで作動不良に陥るロマーニャ製の自動拳銃の方によっぽど驚いた。

「え～っと…ラクダラクダ……あ！　来た来た！！」

周囲にラクダの絵でもないかキョロキョロと目を皿にして通りを眺めていたサブリナが、此方へやって来る一組のラクダ騎兵を見つけたのだ。彼らが近づいてくる、そのやる気の無いラクダの顔が一美の目に飛び込む、そしてパートナーとよく顔が似た、ブリタニア領インドから派遣された兵士の方も一美をじっと見つめていた。

少しばかり扶桑の人々と顔立ちが似ているインドの兵士は、やおら腰の小さな角笛を手に取ったかと思うと、思い切り息を込めて角笛を鳴らしたのだった。

ブーブーブー

蹴飛ばされた豚が断末魔を上げるような、悲痛な音が通りに響く。その爆音にビクッと驚いた一美は銀製のフォークを、驚いた一美に驚いたサンドラは最後までバネが見つからなかったままで組み上げたベレッタ自動拳銃をそれぞれ放り投げてしまった。

「少尉殿！！　こっちでさぁ！　いましたよ、ニワトリムスメ」

「なんですかそれ！　ししし失礼ですよ！！」

軍刀を兵舎に置いてきて良かったと思う。これを吾郎が聞いていれば激怒していただろう。それも激怒を通り越して契約を破棄されそうな勢いで軍刀が叫びだすのが容易に想像できる。

耳を押さえておきながら悪口は聞こえていた一美の前に、ラクダ

の裏から一人の少女が現れた。黄金色の髪は背中まで伸び、頭頂をカールスラント製のソレによく似た規格帽で隠している。上着は混紡のゴワゴワした野戦服で、下着は白の紐ズボンだけ――――ウィッチだ

「あれ…？昨日の食堂で見たような…？」

ナイフを皿に置き、まじまじと目の前に現れたウィッチを見つめる。あの時は野戦服も着ていなくて、上は薄手のシャツ一枚という無防備な格好をしていたのだから服装では判断できなかった。だが奥のテーブルで見た北欧系のウィッチに良く似た横顔だったので、同じ隊の人だと認識した。

「そりゃあそうでしょ、同じ隊なんだから」

やっぱりだった。彼女は更に話を続ける。

「そりゃ昨日もお早く寝ちゃったんだから無理もないか…。あらためまして、私はオルガノビッテ・ロンカライネン少尉だ。スオムスじゃ結構活躍した装甲歩兵だぞ。オルガで良い、堅苦しいのはキライだ」

オルガは床に落ちたフォークとベレッタ自動拳銃を拾い上げる、フォークは皿の上に戻し、拳銃は自らのカバンにサッと忍ばせた。

「それあたしのじゃん！！」

サンドラが喚く。

「官給品が故障したなら申請出してもらえば良いだろ。これで故郷

に土産ができた、ありがとな〜」

悪びれる様子もなく、勝手にお礼までしている。オルガは隣のインド兵に小遣い程度の報酬を渡し、店員にも全員分の勘定を済ませて一美を連れ出した。どうやらミヒル隊長の言っていた『正午の迎え』とはオルガのことらしい。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

「お前、扶桑のどこらへん生まれか？」

解放時の戦闘による弾痕が目立つ壁、路溝には凹んだ小銃弾やMG42の薬莢ガラがあちらこちらに散らばった人気の無い通り、月日が経っても消えない火薬の匂い、そこで一美が受けた質問は何とも簡単なものだった。「西の…九州です。あ、生まれは九州でウィッチの訓練は東京の立川で行ってました！」

ふぅん、と顎をさするオルガは淡々と話しを始めた。

「わたしな、戦争が始まる前に数週間だけだけど扶桑に住んでたんだよ、それも東京にな。親が大使館ではたらいてたから」

（東京に…スオムスの大使館なんてあったっけ？）

東京には各国の大使館が集中して存在するのは知っていた。実際に一美達は訓練学校の社会科見学としてカールスラントの大使館を訪れたりしていたので一応の理解はある。

「それで聞きたいんだけど、その…扶桑食は…作れるか？いや味は二の次で良いから！作れるか作れないかだけ…聞いておこうと」

よほど在扶時の生活が気に入っていたのだろう。オルガの蒼い瞳がアフリカの強い日差しで爛々に輝いていた。

海外派遣された扶桑のウィッチが他国のウィッチに食事をせがまれるのは日常茶飯事なもので『扶桑撫子なるもの、食に疎くて恥かくな』と言われ、訓練学校でも食事は生徒が作り、訓練の一つにもなっていた。

「いちおう作れますよ？　材料さえ足りてれば」

ここは野営地では無い。あくまでも流通の中枢、潮風かおる港町なのだから材料には困らないはずだ。少しでもケチろうとすれば、昨日の夕食の二の舞だ。

「米は市場でも手に入りますが、味噌とか扶桑独特の調味料は無理ですね。たぶん近いうちに仲間達から贈り物が届くんで、もしその中に調味料が入ってたらすぐに作りますよ。」

サンドラ達と一緒に市場を散歩していた時に得た情報が初めて役に立ったのだ。

「ほんとか！！　そりゃありがたい、あと今日の夕食当番は私だから、ちょっと手伝って欲しいな。最近はマトモな料理を食べてないから…」

「もっちろんです！　お役に立てるならなんでもします」

会話は一美が道に転がる弾薬箱に思い切り脛をぶつけるまで続いた。

―――――――――――――――――――――――――――――――

オルガに案内されるがままに歩くと、二機のストライカーユニットを積んだトラックが郊外へ向け出発しようとしていた。運転手に一言だけ断ったオルガがひょいとトラックの荷台に乗り込む。それを見た一美が続こうとしたが、中々あがれない。オルガが手を差し伸べたことでようやく荷台に乗り込むことができた。

遮光用の幌が張られたおかげで荷台は案外快適な空間だった。ストライカーユニットをしまう金属の箱も程よく冷たい。一美が寄りかかる金属の箱は倉庫から出した直後なのだろうか、どこか埃っぽい。一美は小さく咳をしながら服に付いた砂やズボンの周りに付いた砂を落とす。

「到着するにも最低二十分は掛かると思うよ～。今の内に私は寝るから…おやすみ～」

向かいに座ったオルガは防錆の油が程よく塗られた金属の箱に寄りかかり、さっさと目を瞑って眠りに入ってしまった。先ほどとは一転、全くもって退屈になった一美も眠ろうと目を瞑った、箱の中から聞こえる金属摩擦音のせいで眠れない。横になって寝ようとした、箱から漏れる埃や鉄粉が顔に降りかかって眠れない。

結局は演習場に到着するまでオルガは快適な睡眠を堪能し、一美は荷台の中央に座り込んで震動との戦いを続けていたのだった。

より良い一日を（後書き）

作者は生きています

Sham Battle・前編

二人の乗ったトラックは、トリポリ以東五キロ地点にそそり立つ鉄製の見張り櫓のたもとに停車した。

オルガは自らの歩行脚が入った鉄の箱を掴み、使い魔を解放することで易々と重そうな箱を持ち上げ、さっさと降車してしまう。

それを見た一美もオルガを真似て使い魔を解放し箱を下ろそうとしたが、腰から生えた真っ白な羽毛が邪魔をして思うように降車できなかった。

やっとのことでトラックを降りると、トラックはトリポリへと戻っていった。さっさと消えてしまったオルガのせいで一人ぼっちになってしまった一美、辺りを見回しても周りは双眼鏡やカメラを持った将兵ばかりだったので、まずは見知った顔を探す。

日陰もない場所を歩き続け、途中で見つけた給水車がくれた水筒の水を飲みながら探すこと五分、ようやく人ごみの奥にある天蓋の隙間からマリアが手招きをしているのを発見した。

「ちょっとすいませ～ん　とおりま～す」

実家の畑を荒らすイノシシを追い掛け回したときのように素早い身のこなしで将兵をかわし、まっしぐらに天蓋へと向かう。

「お待たせしてもうしわけありません！！　ちょっと迷子になって…」

「そりゃあ天蓋の場所も教えてなかったんだから無理もないよ。隊長もそこらへん反省してたしぃ…」

マリアの目線は一美の顔から水筒へと少しずつ移動していた。どうやら天蓋の中に入る為には入場料が必要なようだ。

「それ…飲んで良い？」

単刀直入に言ったあたり、綺麗な水は久しぶりに見るほどなのだろう。給水車の当番兵には『頼まれてもあげるなよ』と言われたが、上官の命令には逆らえない。

「ど、どうぞ」

躊躇なく水筒を差し出す一美、受け取ったマリアは嬉しそうな顔で緑色をしたダチョウの卵みたいな水筒の蓋を開ける、そして大事そうに一口を飲む。

「ふぅ～、生き返った。そうだ、隊長がお待ちだよ」

水に目が眩んで本題を見失いかけたマリアは一美を天蓋の中に入らせる。布越しに当たる日差しで蒸し暑い天蓋の中はマリアと先に到着していたオルガ、目の前の机でふんぞり返るミヒル、その隣でクリップボードを扇代わりに暑さを凌いでいるエトナを除いた他の隊員の姿は無かった。

「あ～暑い…演習は夕方から始まるってのに、なんでこんな集合時間が早いのかなぁ、喉も乾いたし？…ん～？　良いモノ持ってるじゃないの、一美さん？」

口が悪い隊長が部下をさん付けで呼ぶあたり、やはり砂漠では水が貴重品なのだ。水資源が豊富な扶桑では考えられない事がアフリカでは日常そのものなのだろう。ミヒルに渡した水筒をがぶ飲みされてから、給水車の当番兵の言葉の意味を初めて気づいた。

「アフリカじゃあ水の一杯で一儲けだってできるの。まぁ儲けた金も、ここじゃあ薪の火付けぐらいにしか役に立たないでしょうけどね」

トリポリに着いた時には考えてもいなかったアフリカの水事情。数キロ離れた場所ですら飲み物に困っているらしい。そんな土地でネウロイ相手に戦争が成り立つのだろうか、一美は机に敷かれた北アフリカの地図を眺めながらそう思った。

地図に記されたトリポリには赤鉛筆で丸が付けられている。トリポリから伸びる太い矢印が西へ、西へと続き、最終地点であるチュニジアにも赤い丸が付けられていた。

先週、同期の子から回ってきた新聞に書いてあった矢印と大体が一致する。その記事の内容がこの地図と同じならば、アフリカ戦線の決着は近いということになる。

「早速だけど、今のアフリカの状況はヒドいものよ。ここに着いたばかりのお前に言う私もヒドいだろうね。毎日続く暑さよりは新米への悪口なんてまだ生易しいほうだね、全く」

そう冷たい声で言い放ったのはエトナだった。名前といい顔立ちといい、暑さに人一倍苛立っていることからいかにも寒い寒い北国出身だとわかる。

「大丈夫ですよ少佐、一美は初めての実戦でネウロイをぶっ潰したんですよ。お菓子食べてばっかりな私なんかより素質はありますって」

「確かに、竹西軍曹は元々が航空歩兵科の志望なだけあって、基礎

的な戦闘技能は持ってるみたいだな。　後は陸戦歩兵特有の特殊動作さえ叩き込めば実戦でも十分に使える。　三年も陸戦歩兵やっておいてアフリカに来る前は実戦もロクに経験してない『元』パットンガールズよりは育てやすいかな。」

一美は、エトナの挑発にうまく話しを切り返せず　「あぅぅ」と唸っているマリアの制服左袖に縫われた『パットンガールズ』、リベリオンの猛将パットンの私兵部隊であるソレの部隊章に気付く。

親のコネで入隊した先が将軍の私兵組織とは、製菓会社がそれなりに世に顔が利くのもさることながら、マリア自身の才能も高く買われているのだろう。

パットンガールズと言えば、このアフリカにて活動していた装甲歩兵団である。防塵処理を施したＭ４シャーマン型歩行脚を駆り、常に一体のネウロイにつき数人で攻撃を加え、ネウロイを撹乱させた後、確実に撃破する戦法を得意としている。

平凡な性能しか期待できないブリタ二アとリベリオンの歩行脚は、数で押してこそ価値を見出す事が可能となる。それを率先し、模範となっているのだ。

パットンガールズの出身であるマリアもＭ４歩行脚かと思ったが、一美の隣に置いてあった歩行脚は似ているようで似ていなかった。

「昨日の貨物に入ってたヤツなんだ。前のＭ４ユニットを壊したから予備部品の申請を出したんだけど…新型ユニットが届くって言われてな、砂漠地帯での動作試験も任されたから　さっそく今回の模擬戦闘に持ち出すのさ」

「も…模擬戦？　私も出るんですか？」

一美はようやく目の前の机に置いてある銃弾達の用途に気が付いた。薬莢こそ真鍮製だが、弾頭は実包ではない、非殺傷のペイント弾だ。机に置いてある紙製の弾箱は九ミリ、七・六二ミリ、十一ミリと主要な口径は揃っている、見回すと、外には携帯砲に使う弾薬も木箱に入っていた。

「当たり前だ。でも一美のユニットは隊舎でシャロン大尉が砂漠に対応させる改造中だから使えないから、持ってきた箱に入ってるユニットを使ってくれ」

ミヒルに言われた通り、自分がノリで持ってきた箱の蓋に手を掛け、ガタンと開け放った。蓋を開けたその瞬間、機械油の匂いが一美の鼻を貫く。本能的に息を止め、中身を取り出す。一式中戦車型歩行脚より小型だが異常に重たい、気を抜けば落としてしまいそうになる。

「でたでた、懐かしいなぁ～。それはな、私のお下がりなんだ」

現れた歩行脚は灰色の軽歩行脚だった。所々に弾痕が残る装甲板に守られたエンジンは宮藤理論の提唱より以前の物らしく、動力源は魔力の他に圧搾空気ボンベを使用しているようだ。右腰に付けるシールド補強板に刻印された文字を見ると『Ｐａｎｚｅｒ－Ｋａｍｐｆｗａｇｅｎ０１－Ａ』と書かれていた。

「カールスラントが最初に開発した陸戦型歩行脚、一号戦車Ａ型だ。私はそれがあったからここまで生き延びた」

「ミヒル、確かソイツを使ってベルリンの戦いに参加したのよね。

そのままダンケルクまで撤退して…」

「オラーシャ義勇軍にいたエトナに会ったんだっけか。アレから何年経つんだろうな。あの時は同じ少尉だったのに、いつの間にか先を越されて」

天蓋の中に漂いはじめた重苦しい空気に耐え切れなくなった一美が水筒の水をグビグビ飲んでいた時、辺りに設置された拡声器から“模擬戦闘に参加するウィッチ、記者は速やかに本部へ出頭のこと”といった旨の放送が流れる。思いのほか本番の準備が速く終わったのか、開始時刻を前倒しで開始するらしい。

「じゃあ、皆さんそろそろ…行きません??他の隊員も待ってるでしょうし…」

こっそりと身支度を終えていたオルガが沈黙を破って外に出る。続いてマリアとミヒルが歩行脚に足を通し、各々の銃器を持って入り口の覆いを抜ける。

「私は最後に出るから、先に行ってなさい」

エトナ少佐に追い立てられ、一美も一号戦車に足を通す。古い魔道エンジンのせいか震動も大きい、口いっぱいに水をためた一美は、同梱されていたＭＧ１３機関銃と七・九ミリ口径の模擬弾の箱を抱えてオロオロと外に飛び出して行った。

Sham Battle・中編

「第三一〇統合戦闘装甲団、全員集合しました！」

「こちら第三〇八統合戦闘装甲団、欠員無し！」

「第三三五統合戦闘装甲団、ただいま到着です」

北アフリカに展開する幾つかの部隊がトリポリに集結し、小さな日覆いに設営された本部に各自の点呼を行っていた。どうやら他の隊は今日付けで到着していたらしい。

実戦の機会を失って落胆するウィッチや、昨日のネウロイの残骸……水色の結晶を集めて自慢しているウィッチもいた。

「第三〇九統合戦闘装甲団、参加者はこれで全員です」

一美はミヒルのやる気ない声を、そして『装甲団』という単語を聞いても反応しなくなるのを感じ“あぁ、やっぱり私は装甲歩兵になるんだ”と胸中で呟いていた。

「どしたのさ一美？　お腹痛いのか？」

帰国した際の言い訳を考えていた一美のしかめ面にマリアが心配する。

「ん～と、その顔はきっと故郷の風景でも想像していたんでしょう？　だいじょうぶ、私達はこれから故郷の土を踏めるかも分からないんだから♪」

いつの間にやら、一美の隣にはヘレーネが、他にもテントにいなかった隊員達が立っていた。彼女も周りと同じように最小限の戦闘用装備を身に付けている、ヘレーネに至っては過激な言葉も相俟って相当にやる気が満ちているようだ。

「おぉ、もう集まってたか。じゃあ早速だが分隊の発表をするぞ」

受付の役割を果たしていたカールスラント製無線指揮車Ｓｄ．Ｋｆｚ．２５０／３グライフから戻ってきたミヒルとエトナが書類と紫色に染められた１～１１の番号が振られたビブ（ゼッケン）を持って戻ってきた。

「まずはＡ分隊として……隊長がエトナ少佐、副隊長にシャロン突撃員にクリスとオルガとロゼ　無線はヘレーネが担当してくれ。Ｂ分隊は隊長がわたしで……副隊長にマリア　銃手はアリシアと一美　無線手をレイ　に決定した。　Ａ分隊はネウロイ役である三一〇統合戦闘装甲団ＡＢ分隊に突撃を行い、ソレをＢ分隊で援護する算段だ。Ａ分隊が三一〇と戦闘を行っている間にわたし達Ｂ分隊が前線を突破して、あそこの……Ｂ１７の残骸がある地点に篭城する三三五統合戦闘装甲団を叩く。」

「んで、Ａ分隊の生き残りが後続友軍の三〇八統合戦闘装甲団と合流してＢ分隊の援護をすれば良いわけね？　なんかミヒルの作戦って突撃ばっかりよね、もう少し距離をおいて戦っても十分だと思うけど……」

「やっぱり前線を進めないと何も変わらないわよ。　さ、移動しましょう。他の隊も移動しはじめてる」

模擬戦に参加するウィッチ達が続々と即席演習場に向かって行く。
三〇九の隊員も遅れないように集団についていった。　これ以上の迷子はごめんなので、一美はマリアの背中に抱きついていた。
はたから見れば微笑ましい光景だが、彼女達は両脚に物々しい機械を穿き、腕には可愛らしい容貌とは似つかない無機質の小銃や携帯砲、短・軽・重機関銃を抱えているのだ。

受付の装甲車から開始地点までは歩いて三十秒程度だった。　後ろには報道陣や見物客の詰める天蓋と櫓もある。　今回の模擬戦は陸戦ウィッチの技術向上というより、世間に陸戦ウィッチの活躍を広めて志願者を増やすイメージアップが第一の目的なようだ。

「観客の視線を集めればいろんな業界からスカウトされるわよ！」

「次の募兵ポスターの被写体は私が頂くわ！」
一美の後ろで待機している第三〇八統合戦闘装甲団に所属するウィッチが急に落ち着きを失っていた。

「マリアさん、陸戦隊って宣伝しないといけないぐらいウィッチは人手不足なんですか？　扶桑の飛行学校でも去年は陸軍航空隊だけで十人も連合軍に召集されてますけど…」

扶桑の戦車学校を一美は見た事も無いので詳しくはわからないが、飛行学校よりは人数も多いだろうと思っていた。

「生まれつきウィッチの能力を発現できる子は少ないからね、各国の軍が適正検査を呼びかけてるんだって」

「けれどやっぱり人気は航空歩兵だよ、素質のある子は総じて航空

歩兵の仲間入りだよ。おかげで陸戦ウィッチの人気はだだ下がり、今回の模擬戦はわたしたち陸戦ウィッチの命運がかかってるんだ。」

アリシアの顔がキラキラと輝いていた。やはり映像業界に対して人並みならない情熱を持っているようだ。

「各国で志願者が増えなかったら連合陸軍の予算は大幅カットらしいからな、そりゃ誰でも気合いが入るさ」

ネウロイに侵略された今では珍しい、カールスラント製の刻印が入ったＭＰ４０短機関銃の点検を始めていたミヒルの顔は曇りきっていた。　凛々しい顔が勿体無いぐらいに。

“本番四十秒前！”

受付のスピーカーから聞き覚えのある声で開始準備のアナウンスが流れた。　ややカールスラント訛りのブリタニア語、昨日のタイガー戦車に乗っていた車長の声だった。

“本番二十秒前！、入場許可証を持っていない者は演習場から退場せよ！”

横にいるマリアやミヒル、初めて間近で見たレイ軍曹が武器を構え始めるのに合わせて、一美もＭＧ１３機関銃に据え置き式銃架を装着したものを慣れない手つきで背負う。

「（こんなの持って突撃するのかぁ……）」使い魔を解放しているので重量は苦にならなかったが、異常に長い銃身は一美の頭二つ分は突き出ていた。　軍刀は隊舎に置いてきてしまったので吾郎の声も聞けない。　こういう時こそ助言を聞きたかったが、仕方がない。

“十秒！……五、四、三、二、一……”

乾季の砂漠に沈み行く西日は未だに暑い、ウールで編まれた扶桑陸軍の制服は、緊張と体温から出た汗を吸って重さを増す。　ちらつく陽光に目を細めるウィッチも多かった。　有視界戦闘では先に相手を発見した方が有利である、どうやら外出時に制帽をかぶってきたのは正解だったようだ。

“ゼロ！、訓練開始ィィィ！！”

開始を告げるアナウンスて共に、獣耳を生やしたウィッチ達が一斉に行動を始める。隣に展開していた第三〇八統合戦闘装甲団の隊員はすぐさま稜線の影に隠れ、ネウロイ役が籠城するＢ１７の残骸までの距離を測り始めた。

「Ａ分隊ついてきて！　こっちはシールド使って良いんだから残弾だけ気にしてればいいのよ！」

まずはエトナが先陣を切り、後ろからついて行くＡ分隊の陣形を指図する。　決定された陣形は一列横隊、敵に射撃対象を増やすことで目移りさせる目的だ。

「さてさて、いっちょ行きますか～」

‘紫の五番’のビブを着たオルガは目の前の稜線を越え、双眼鏡でＢ－１７の残骸を確認する。　残骸の中ではネウロイ役のウィッチが配置に着き、武器をこちら側に向けていた。

「もうちょい……もーちょいなんだけど……」

倍率が小さいのかピントが合わないのか、だんだんと上体が稜線に乗り出す。　周りのウィッチは彼女が狙撃されないか心配でならなかった。　そして彼女達の予想は的中することになる。
数発の乾燥した銃声が聞こえたのとほぼ同じ時、オルガの身体が二～三度よろめいたかと思うと、最後の衝撃で思いきり真後ろへ吹っ飛んでしまった。　オルガの身体は、そのまま一美達のところまで転がり、仰向けで停止した。

“紫の五番がやられました！　オルガノビッテ・ロンカライネン少尉です！！　スオムス陸軍代表、早々の退場です！”

観客席の民間人達が簡単に状況を知れるように、実況スタンドからリアルタイムに模擬戦の様子を伝えていた。　実況スタンドは櫓の上であり、上方視点からの的確な戦闘推移が可能なようだ。
「痛っ……あぅぅ～」と呻くオルガの胸には青い塗料がべったりと付着していた。　一美に負けないぐらいの膨らみ無き双丘への着弾、威力は相当だろう。

「……とまぁ、被弾するとこんな感じにむなしい結果になる。　私は観客席に戻るとしようかね」

寂しい背中を見せて退場するオルガを全員で見送り、エトナ率いるA分隊は敵線へと突っ走ってしまった。

――

「いい？　まず私とシャロンで敵前面へ制圧射撃。　その間にクリスがシールド張りながら敵線へ突貫、それにロゼも続いて！！」

「えぇ！？？　わたしの歩行脚って砲兵科用の筈じゃ！？」

「そ……そうですよアンダルシア少佐！　リベリアンなんかに私の援護が務まるはずありませんわ！！」

先日の戦闘でスクラップの烙印を押され、演習の遮蔽物として第二の人生（セカンドライフ）を歩み始めたクルセイダー中戦車『アールグレイ』の裏に隠れたＡ分隊。　砲塔の影から敵線を覗くエトナの隣には、突撃命令を受けたクリス、その隣にはロゼが待機していた。

小柄で赤毛のロゼが言うとおり、彼女の歩行脚はＭ４シャーマンを改造したＭ７プリースト自走砲だった。　本ユニットは後方からの砲撃に特化した砲兵科仕様であり、シールド防御力と機動力を犠牲にしている。

完璧な人選ミスだった。　分隊を編成したエトナの目には、ロゼの背負う１０５ミリ砲は『なんかデッカい大砲』としか見えていなかったようだ。

「少佐、突撃に向かないマートリンはここに待機させて、まずロンザプトンから突っ込ませましょうよ。」

長身を窮屈そうに屈め、ブロンドの長髪を持て余していたシャロンがエトナに進言する。　エトナも良い作戦が浮かばないのか、黙って首を縦に振った。

「良いかクリス、まずお前が前進すると同時に私が煙幕を投げて前進を助けよう、あとはロゼが支援射撃を八秒間行うから、その後にシャロン大尉と私が続く、わかったか？」

「がってん！」

エトナが雑嚢から煙幕手榴弾を取り出し、ピンをクリスの目の前で引き抜く。　それを合図にアールグレイの影から飛び出すクリス。

彼女の使うブリタニア製の巡航ユニット『カビナンター』は動作も良好で、右へ左へ乱射する2ポンド砲も十分に敵を怯ませていた。

だが、いざ突撃しようとした瞬間、クリスの足がもつれ、アールグレイより前方およそ6メートルあたりで顔面からコテン、と転倒した。

「へへ……こけちゃったぁ……」

自分の痴態をとても恥ずかしそうに立ち上がり、赤面した砂だらけの顔をエトナたちに向ける。

「な……」

事の一部始終を見守っていたエトナの手から煙幕手榴弾が三人の風上にポロリと転げ落ちた。　煙幕はエトナの足元から風下にいるシャロンとロゼに当たり、二人の視界を著しく低下させた。

「う～ケムい～。とりあえず援護射撃……と」

ロゼは命令された通り、高飛車でおっちょこちょいなブリタニアンをイヤイヤ援護する状態に入っていた。　しかし流れてくる煙幕に視界を奪われ、手の平に握る砲角ハンドルの仰角調整が段々と乱れ始めていたが、ロゼは全く気づいていなかった。

バゥン！！、とロゼの背負う榴弾砲から時限炸裂のペイント弾が

撃ち出される。　弾頭はきれいな放物線を描いて敵線にまっしぐら――――とはいかず、現実ではどぎつい放物線を描き出し、弾頭はクリスの真上で炸裂した。

小さな赤い霧を上空に漂わし、飛散した塗料は容赦なくクリスの全身を覆った。クリスが全てを理解するより前にアナウンス。

“おぉ～っと！　紫の四番、ロゼ・マートリン少尉が味方に誤射、誤射しました！　紫の九番、クリス・ロンザプトン少尉ここで退場です！”

頭からつま先まで真っ赤な塗料に包まれ、茫然自失していたクリスだったが、意外と潔く自分の敗北を認め退場して行った。

「（コレは絶対わざとよ、わ・ざ・と！　べぇ～っだ！！）」

ハズだった。　どうやらクリスは相当にロゼを恨んでいるようで、今回も退場する時にロゼへ向けて舌を出し、挑発していた。

「クリス少尉がいなくなっては仕方がない。　Ａ分隊は全員で敵へ突撃する！！　続けぇ！！」

こうなればヤケクソだと言わんばかり、エトナは革のホルスターからナガン回転式拳銃を引き抜き、彫刻や埋め込まれた真珠で煌びやかに光る歩行脚を唸らせ、敵へと突撃してしまった。　続いて無線機を背負うシャロンがヤレヤレと肩をすくめ、自衛用に持ってきた『リベリオン・スプリングプレインス造兵廠製Ｍ１ガーランド半自動小銃』を構えてアールグレイの影から飛び出して行った。

「わ、私は砲兵だもん！　別に突撃しなくたっていいんだから！！」

当たり前なことを叫び、突撃と言う名のやけっぱち行動を辞退するロゼ。　その声は興奮しているエトナの耳に入ることも無く、無線機の周波数を弄ってロマーニャのラジオを聞いていたシャロンの耳にも聞こえなかった。アールグレイの影に隠れ、敵側から聞こえる銃声と奇声に耳を傾ける。　最初は複数聞こえていた銃声も次第に数が減り、遂にはパタリと一切の銃声が止んでしまった。

不思議に思ったロゼがアールグレイの向こう側を覗くと、砂埃の向こうに突撃した二人の影がうっすらと確認できた。　嬉しそうにこちらへ手を振っている。　信じられない。　十人は下らない敵の陸戦ウィッチを二人で片付けてしまったのだ。　それも一人は回転式拳銃、もう一人は半自動小銃でだ。

いや、もしかしたら難を逃れた敵の生き残りがいるかもしれない。

全滅していて欲しい、そう願いたいと思っていたロゼの肩を何者かの腕がガシッと掴んだ。

「わぁ！！　敵だ敵だ！！」

「ちょ、ロゼさん落ち着いて！！　私です一美です！！　ひぃ！　拳銃向けないで！！」

自分の肩を掴んだのは敵ではなく味方だったことに安心し、スプリングプレインス社製のコルト自動拳銃をホルスターに戻す。

「あぁ……昨日付けの新人か。おまえB分隊だろ？　なんでここに？」

とりあえず味方が増えたことに安心したロゼだったが、この真っ白な羽毛が邪魔臭い扶桑魔女がやって来た理由について尋ねなけれ

ばならない。

「いやぁ～。　ちょっと隊長に“新兵は現場を見て育つ！”と言われまして、エトナ少佐の戦いざまを見に来たんです。　百聞は一見にしかずと言うか、習うより慣れろと言いますか……」

彼女はエトナ少佐が東部戦線で『プリンセッサ・ナストプレニエ』とあだ名されていた過去を知らない。　少佐の夫役であるミヒル隊長にうまく騙されたようだ。

この純粋で素直な扶桑の魔女が、いつか命知らずなオラーシャ貴族の息女と同じような行動をするようになるのか、とロゼは重い溜息をついたのだった。

Sham Battle・中編（後書き）

※1、スプリングプレインス
この世界でのスプリングフィールド造兵廠にあたります。「野＝Field」を「平野＝Plains」に置き換えただけです。単純です。

※2、プリンセッサ・ナストプレニエ
ロシア語で「攻撃的お姫様」って意味です。そのまんまです。ナストプレニエって単語は、対ロシア戦モノのゲームでよく目にしますね。

Sham Battle・後編

トリポリ郊外で開催された模擬戦演習も、ネウロイ役の第一線を突破するという中間地点を迎え終盤へ突入していた。

よくニュース映画とかでもてはやされる航空歩兵の模擬戦。実は撃墜や被撃墜の判定ラインが甘く

『いまのは尾翼だもん』

とか

『まだ飛べてる』といった駄々こねもあり、結果もうやむやに終わってしまう。

しかし、陸戦歩兵の模擬戦はペイント弾が一発でも当たれば退場と極めて単純である。明確なルールは馬鹿なウィッチでもわかりやすい。

それは勿論、一美にとってもである。

「エトナ少佐、ブリタニアンの代わりが到着しましたよ～」　B－17の残骸を利用したネウロイ役の陣地と陸戦歩兵のスタート地点を分断するように掘られた塹壕はエトナとシャロンの手により制圧。後続としてロゼと合流した一美が二人の元に到着した。

想定されるふたつの戦闘の内ひとつが終わり、後方に待機していた他隊のウィッチがネウロイ役のウィッチと場所を交替する。固定砲型ネウロイに似せる為に掘られた塹壕は、今度は陸戦歩兵用の遮

蔽壕としての役割を果たしてくれる。

「そうか、クリスよりは使えそうな気はするが……この羽毛じゃ格好の的だな」

一美の腰から生える真っ白な鶏の尾羽、それに赤みがかかっている頭頂部の毛髪。　どうみても鶏そのものだ。

「し、仕方ないじゃないですか！！　いちおう鳥の使い魔ですよ！」

航空歩兵となるウィッチの中でも、使い魔が鳥であるウィッチは能力が数枚上手である場合が多い。

「ほう。では共に行こう、敵陣へな♪」

それもそうか、とエトナが頷き。援軍を待たずして敵陣へと突撃する準備を始める。要するに敵の準備が終わる前に前面を叩けば、たとえ戦法が拙くても十分な戦果を挙げられるということらしい。

巧遅は拙速に如かず。一美は学校の図書室で読んだ孫子の兵法書の一部を思い出す。

やるんだったら、やるしかない。それが扶桑陸軍航空隊立川飛行学校高等科丙組の標語だった。

「ミヒルたいちょ～。こっちは準備ＯＫで～す♪」

Ａ分隊無線士のシャロンが、塹壕の右奥に待機していたＢ分隊へ向けて口頭で呼びかける。

無線を使わず、声を上げて。

「こら！！　無線つかえ！　無線！！」

「眠い……ひまぁ……」

それでは無線士の意味が無いだろう、と言わんばかりに呆れ帰ったミヒルと。隣にちょこんと座り、交信の無い無線機を背負って退屈そうにしているレイ曹長の姿があった。

トラックの中で聞いたオルガの話によれば。レイ曹長はガリアはパリの出身であり、ネウロイ侵略後にブリタニアへ渡った戦災者であるという。しかし避難時の騒動で家族とも離れ離れとなり、ブリタニアの孤児院に預けられていた。

来るべきバトルオブブリテンの為、ウィッチの募集をしていた士官が彼女をスカウトし軍人となる。

適正診断ではナイトウィッチであると判明し、夜間防空要員として航空歩兵と高射砲とのやり取りを繋ぐ連絡員として従事したという。

なぜ統合戦闘装甲団へ配属されたかは不明だが、本人の強い要望があっての異動だったそうだ。

「隊長！　敵が発砲し始めました！！　挑発だと思います！」アリシアが叫ぶ。

「左側面の友軍、進撃を始めました！！」マリアが声を荒げる。

友軍の第三〇八統合戦闘装甲団は愚かにも敵の挑発に乗り、塹壕

から飛び出して行く。歩行脚の履帯から砂埃を上げ猛然と進む三〇八部隊。それを確認した敵は残骸の間から各々の銃身を伸ばし、狙撃を始める。

何発ものペイント弾が彼女達を襲い、容赦なく真っ青に染め上げる、どうやら抵抗させる隙すら与えないようだ。最初は十人近く残っていた三〇八部隊も五人、六人とじわじわ減り、遂には二人のみとなってしまった。

二人は残骸正面の小さな窪みに逃げ込み、必死にシールドを張って誰かの助けを待っていた。

そんな仲間の窮地にも、三〇九部隊は指を咥えて見ているしかないのだった。

「あれじゃ助けにも行けない、釘付けどころか……ワザと命中させないで楽しんでやがる」

敵の注意は全て二人に向いているのだろうか。ミヒルが塹壕から身を乗り出して光景を眺めていても流れ弾すら来る事は無かった。

「わたしが、わたしが助けに行ってみます！！」

自己犠牲の精神が働いたのか、それとも暑さで頭がおかしくなったのか。一美はそう言って立ち上がり、自らの機関銃を手に取る。

「無理だよ一美。アレを助けるのは私でも難しい……」

「見殺しにはできませんよ！！　何か方法があるはずです！！」

なだめるマリアを振り切り、正面から突撃しようとする一美。

「やめておきなさい。無謀すぎるわよ」

エトナもいい作戦が浮かぶまで全員を待機させておきたいと思い、一美を引き止める。

「嫌です！　模擬戦ですら味方を守れないで世界を守ろうなんて馬鹿げて……」

バシンッ――――、一美の顔を素早い平手打ちが凪ぐ。

「新米のペーペーに何が分かるんだ！！　そりゃあ私達は航空歩兵みたいに有名でもない！　それはな……報道される前に死んじまうからなんだよ！！」

一美を叩いたのはミヒルだった。平手打ちした右手は震え、目には涙が浮かんでいる。

「死んでも世間の美談にされる航空歩兵と違って私達は死んでも世間は何とも思わない！　ただ死体となってカラスに食べられるだけなのよ……私は自分の命が惜しい！……模擬戦だろうが何だろうが……死んだらお終いなのよ！！」

「……す、すいません。頭に血が上って……」

平手打ちの衝撃で首が変な方向に曲がった一美。すぐさまミヒルの顔を見ようと首を正面に戻した瞬間。ミヒルは一美をギュッと抱き寄せた。朝に炊いた扶桑のお香が制服に残る一美と違い、昨日の午後まで風呂に入っていたミヒルの体からは、既に砂の匂いしかし

なかった。

「いいんだ。お前はまだ何も知らない」

ミヒルの腕力がグイグイと増し、顔を真っ赤にした一美に鯖折りをかけんとばかりに締め上げる。そして更に言葉をかけた。

「知ってなくて当然なんだからな。ほんと、お前を見てると昔の自分を思い出すよ」

新兵には二種類の者がいる。上官に叱られた者と叱られなかった者だ。

無論。前者は上官に死んで欲しくないからなので、上官の命令を傾聴していれば自然と古参兵の仲間入りを果たせる。

一方、見放されたとも言える後者は寿命も長くはない。

今、ミヒルは曲がりなりにも『戦場』で新兵を叱った。味方に背中を預け合う場所で、『死んで欲しくない』と伝えたかったのだ。

「とりあえず、当初の作戦は実行不可能ね。ミヒル、竹西軍曹の言うとおりにしたほうが良いわ」

正面に気を取られた敵の背後に回り込む作戦にはエトナも賛成のようだ。

「わかった。私とマリアそして一美とアリシアで稜線の影から敵陣地に接近する。無線士の二人はここに待機して、残りはエトナと一緒に味方の救出に向かってくれ」

第三〇九部隊の生き残り全員が静かに頷く。この作戦がどんなに

難しいものだろうと、それ以上に困難な実戦を乗り越えてきたのだ。
その中で一人、まだミヒルに叩かれた頬がヒリヒリして少し厭戦気分に陥っていた一美であった。

決着

「まずい……あまりに時間がかかり過ぎる」

「少佐殿、終了予定時刻より二時間も余裕があります。彼女らの演習はまだまだですよ」

演習を監視塔から観戦していた黒い士官服の中年男と、ツレの青年。

中年男のあだ名は『女嫌いの万年少佐』本名はライヒ・シュタイバーンズ。

ツレの青年はヘッセ・ワイゼルト。互いに戦車乗りで、かつ車長と射手のコンビでもある。

ベルリン撤退戦を生き抜いた嘗ての猛者も、さほど激戦地ではないアフリカに配属されると腕時計の針にすら敏感になってしまうのだろうか。

「違う、そういう問題じゃないんだよ、ワイゼルト君。ここで演習開始のアナウンスと演習終了のアナウンスさえ入れれば簡単な仕事なんだが……」

ライヒは手持ちのクリップボードに挟んだ『連合空軍航空機飛行予定表・トリポリ上空』の書類をヘッセに手渡す。

「確かに、私達がネウロイに徹甲弾を撃ち込んで『生還する』よりは簡単な仕事ですね」

慣れた手つきで六月のページを開き、今日トリポリ周辺を通過する航空機の有無を確かめる。

「そろそろ連合軍の航空隊が通過予定時刻ですが、それがどうかしたのです？」

連合軍の航空機であれば通過前に無線連絡が必ず入る、それに民間の航空機は彼らに随伴する事が多い。

ライヒはじわじわと垂れる額の汗を拭い、いつになく重たい唇をもごもごと動かす。

「実は、昨日のネウロイ襲撃の件で上層部がトリポリ駐留部隊の監視能力の低さを疑ったのだよ……」

はぁ～、と深くため息。そしてライヒは続きを始める。

「上層部は“ネウロイが如何にしてトリポリまで接近できたのか探る必要がある。検分に向かう部隊は丁重にもてなしてやってくれ”と言われたのだ」

確かに、ネウロイの行動パターンや進行ルートを見極められるのは地上からでは無理だろう。しかし、ちょうど陸戦ウィッチ達の模擬戦中に上空を通過するのは、何か嫌な予感しかしない。

「早く終わると良いですね、模擬戦」

何かを悟ったようにカールスラント陸軍のヘルメットを被り、戦車眼鏡を装着したヘッセだった。

―――――――――――――――――――――

「とりあえずエトナ達が敵の注意を引いてる内に決着を付けないとな」

Ｂ１７の胴体に隠れた十人前後のウィッチを背後から攻撃する為に稜線の影から回り込み、そこで指示を出すミヒルと随伴するマリア、一美は歩行脚のエンジンを切り、機会を待っていた。　エンジンの駆動音で相手に場所を気付かれてしまう危険を未然に防ぐ為だ。

「あのエンジンの裏から狙撃すれば数人は倒せそうですね。アリシアを呼んで狙撃させましょう」

無線士から銃手となったシャロンの無線機を引き継いだマリアが無線の受話器を手に取り、
声を抑えてアリシアに自分達と合流するよう要請する。　暫くしてアリシアが到着すると、彼女も歩行脚のエンジンを切った。

「ビエナット曹長ただいま到着。　んで、狙撃ポイントはどこです？」

アリシアの穿く歩行脚はＭ５スチュアートと言う軽歩行脚だ。
搭載可能火器やシールド強度を犠牲に軽快な走行を実現した当機はリベリオン陸軍のスカウトウィッチ達を始め、多くの部隊で評価を得ている。

「あのエンジンが見えるか？　あの裏から狙えばＢ１７の胴体から死角の位置で狙える筈だ。お前の腕なら大丈夫だろ」

ミヒルがＢ１７の胴体からやや斜め後ろに転がる焼け焦げたエンジンを指差す。

「がってん！　私とコレさえあれば四人は片付けられますよ！」

自信満々に自らの小銃を一美達に突き出すアリシア。　それはガリア製の狙撃眼鏡を装着したスプリングプレインス製Ｍ１９０３ライフル、初期のリベリオン軍が使用したボルトアクション式の小銃だ。

「よし、　じゃあ行ってこい。　私の期待を裏切るなよ」

あいあい　と口早に返事をしたアリシアは歩行脚の履帯を使わず、走ってエンジンの裏へ滑り込んだ。　幸い敵にも見つかっていない。

陰から覗けば敵役のウィッチがエトナ達に雨あられとペイント弾を撃ち込んでいる。

「（距離は……ざっと四十メートル――――風は向かい風――――手前のあの子はラベンダーの香水ね……まず一発！）」

狙撃眼鏡に右目を押し付けたアリシアは狙いを付けたラベンダーの匂いがするウィッチめがけて素早く引き金を引いた。　ドパァンと低音の銃声が響く。

一美達には良く見えなかったが、　ラベンダーの匂いがするウィッチの右胸には赤い塗料がベッタリと付着していた。

未だに見つかっていないのを良いことに、アリシアは続けざまにＢ－１７の胴体に隠れた生き残りを狙撃して行く。Ｂ－１７の胴体

から少し離れた場所に置いてある千切れた先端部に隠れている数名の敵が狙撃されていることに気づき、サッと身を隠す。

Ｂ－１７の胴体に隠れていた全てのウィッチが体のどこかしらに赤い塗料を付けて外に出てきた。　どうやら胴体部の制圧は終了したようだ。　放送席の実況も彼女達の名前を忙しく読み上げている。

「アリシアの地点からだと先端部の狙撃は無理だな。だが相手は隠れたまんま、さっさと接近してさっさと終わらせよう」

そう部下に言って聞かせたミヒルの目には、残骸の向こう側でエトナ達が手信号を繰り返しているのが見えた。　釘付けにされていた味方の救出作業が終了した事を知らせたいようだ。

残るはＢ－１７の顔である機首に隠れた三人ほどの敵。　こちら側は二倍以上の戦力を残している。操縦席に二人、機首銃座に座るのが一人だ。

ミヒル達別働隊は歩行脚のエンジンを入れ、突撃準備に入る。一美も自らの歩行脚へ息を吹き込み、　背中に背負ったＭＧ１３機関銃を地面に置く。

「一美が八秒間の事前射撃を行った後、　残骸の影から近づいて制圧する。　必要以上の模擬弾は撃ち込むな、　けっこう痛いんだから！　よし一美、撃て！」

一美は車輪付き銃架に装着したＭＧ１３の引き金を絞り、銃身の跳ね上がりに注意しながら機首の残骸へ向けて援護射撃を開始した。模擬弾に詰められた塗料が機首を赤く染め上げる。それに合わせて

ミヒルとマリアが残骸へ向けて前進を始める。

「（――六つ――七つ――――八つ！！）」　頭の中で数字を数え、言われたとおり八秒目で指を引き金から離す。援護した二人も残骸に取り付いた。

想定される接近戦の為にミヒルは携帯砲を――マリアはＭ１Ａ１短機関銃を地面に置き、各々が腰のホルスターから拳銃を引き抜く。

「（おいマリー、上官命令だ。先に突入しろ！）」

「（冗談きついっすよ体長。いつも菓子が食べれるのは誰のおかげだと思ってるんですか！）」

機首の切断部で待機している二人は小声でどちらが先に突入するか揉めていた。

ミヒルの拳銃は９ｍｍルガー弾を使う『尺取虫』のルガーＰ０８、マリアの拳銃は１１．７ｍｍのガバメント自動拳銃だ。どちらも接近戦なら無類の強さを誇るが、使う本人が怖じ気づいているなら性能を発揮できない。

「（わかった、わかりましたから隊長！　だからこっちに銃を向けないで下さいよ！）」

争いはミヒルがルガーの銃口をマリアに突き付けたことで収束した。マリアは溜め息混じりにガバメントの遊底を引き、初弾を薬室へ送り込む。ミヒルも同様にルガー本体後部のトグルを引っ張る。

マリアは機首に隠れている敵がエトナ達へ射撃を再開したのを見

計らい、彼女達が持つ携帯砲の砲身を交換する瞬間を突入の機会とした。

「そろそろ砲身が焼けそう……ジャニス、交換するから援護して！」

機首の中から銃声に紛れてそんな声が聞こえてくる。続いて携帯砲の砲身を機関部から引き抜く音が聞こえた。

遂にチャンスは回ってきた。操縦席に陣取る二人のうち一人は砲身の交換中、もう一人は弾幕の不足分を補う為に視界はエトナ達に釘付けだ。さらに一人は前方機銃座の座席を利用していた情報が入っていたので、今は真後ろが完璧にガラ空きなのだ。

まず始めにマリアが機首へ突入した。砲身の交換を終えたウィッチが携帯砲をマリアへ向けるが早いか、マリアのガバメントが先に火を噴いた。

ゼラチン質の塗料塊が彼女の携帯砲に――腹に――腕に――胸に当たって行く。異変に気づいたジャニスと呼ばれたウィッチが振り向くが、彼女もまたマリアに撃たれ、両脚と右肩に模擬弾を受けた。

残る前方機銃座のウィッチは自らの後ろに敵が回り込んで来た事を理解したのか、風防から突き出していた携帯砲――オルガを倒した得物を捨て、振り向きざまに彼女も腰の拳銃を引き抜いた。

「チェックメイトだ！　くらえ！」

勝ち誇った顔でマリアはガバメントの遊底に乗っかる照門と照星の三点を真横一文字に並べ、彼女の腹部めがけて引き金を絞る。

バチン、と乾いた金属音が操縦席に木霊する。実は今まで腰だめ

で射撃し、ここにきてはじめて右目で照準を覗いたマリアはガバメントの遊底が後ろに引ききったままな状態なのに気づかなかったのだ。

「きゃははっ！　馬鹿ね、自分の残弾も覚えてないなんて！！」

相対する敵のウィッチは必死に弾薬ポーチからガバメントの弾倉を探すマリアを笑い、自らの拳銃をマリアに向ける。ルガーによく似たノイエ・カールスラント製のＰ３８拳銃が日光で妖しく光っていた。

Ｐ３８拳銃の引き金は躊躇うこと無く指をかけられた。突き出た銃身から模擬弾が放たれ、マリアの開かれた胸元に色の花を咲かせる……はずだった。

「（あれ？　おかしいな……）」

自信満々に引き金を絞ったウィッチが疑わしそうに弾の出ないＰ３８拳銃を持ち上げる。

あれぇーおかしいわねー。そう彼女が呟いた瞬間、マリアの後ろから銃声が聞こえたかと思えば、彼女はＰ３８拳銃を投げ出し、眉間に真っ赤な塗料をつけて機長席に力無く寄りかかる。

「馬鹿なのはお前だ。安全装置（セーフティー）が入りっぱなしだぞ」

なかなか決着がつかない機内の状況を心配したのか、マリアには荷が重かったと反省したのか、はたまたヒーローは遅れてやって来る展開を待っていたのか定かではないが、ついにミヒルが颯爽と機内に現れたのだ。

「ふ、二人もいるなんて聞いてないわよ！」
最後の抵抗と言わんばかりに文字通り顔を真っ赤にしたウィッチがミヒルとマリアに怒鳴る。

「ふん、私達を倒したところで外には羽毛が目立つけど機関銃を構えた待ち伏せが一人いるわ。あと、さっきから持ち場を離れてずっと操縦席を見物していた狙撃手が一人。彼女達を倒せたところで前方の牽制に手一杯だったあなた達が勝てたのかしら？」

ミヒルが弱者を見る目で彼女を見下ろす、敵は最初から籠城戦を行うのに後方の警戒を怠ったのが敗北の原因だろう。

少しもリスクを負わずに回り込めた事にミヒルは光惚し、快感さえ覚えていた。今も敵の隊長を見下ろしていると背骨の中の神経がぞくぞくするのだ。

「隊長～助かりましたよぉ～！」

死体役のウィッチ達がいるにも関わらず、マリアは思い切りミヒルへ抱きつく。

「ばっ……お前やめっ！　どかせっ！　お前の右足が私のアレに当たって……あうっ！」

その頃、観客席や本部からも中の様子は見れないので、皆が固唾を飲んで見守る。今までは談笑していた『墓地』で待機する退場したウィッチ達も自然と静かになっていた。

きっと残骸内で熾烈な戦闘が起きているに違いない。それは誰も

が思っていたことだった。でも操縦席の様子を見れたのは機内の死体役と、照準眼鏡越しに見物していたアリシアだけだった。

決着（後書き）

最後の展開がアレだからって……べ、別に作者が壊れたわけじゃないんだからねっ！

ニワトリと星（前書き）

「マリアさんマリアさん！！　マリアさんのミドルネームの『T』ってどういう意味ですか？」

「おぉよく聞いたな、じゃあ一美にだけ教えてあげよう……実はな……『トーマス』なんだよ」

「えっ……」

ニワトリと星

［訓練の結果、第三〇九統合戦闘装甲団のウィッチが勝利を収めました！］

観客席に付けられたスピーカーから模擬戦の決着を伝える放送が流れる。カメラを構えた報道陣や撃たれて退場していたウィッチが我先にと帰ってきたウィッチ達に群がった。

「ふー、やっと終わった……」

いまいち出る幕の無かった一美の周りには一人の記者も集まらない。記者のような矢継ぎ早に言葉を投げてくる人は苦手だったが、やはりインタビューの一つでも来て良いんじゃないかと思い、溜め息が出た。

「お疲れ～！最後まで生き残ったなんて凄いな！私なんて真っ先に帰ってきたのに～」

さっさとテントへ帰ろうとする一美を第一敗者のオルガが引き留めた。塗料で汚れた上着は脱いだのか、オルガの上半身は黄色がかった白シャツを着ているだけだった。

「は、はい！なんとか生きてました！！」

「よしよし、それでこそ私の子分だな♪」

「いつ子分にしたのさオルガ、一美は私が拾ったんだぞ？」

「あ、マリアさん！お疲れ様です！（私を拾ったって……）」

二人の会話にマリアも参加してきた。何だかんだ大活躍した彼女に記者がくっついていないところを見ると、手柄は全てミヒルが持って行ってしまったようだ。

「皆さん、拾うなんて言葉を使って恥ずかしくないのかしら？仮にも人間でしょう？」

そこへ塗料を垂れ被ったクリスも現れた。既に塗料は洗い落としていたようで、やけに髪の毛が湿っていた。

「（に……人間！？　仮にも！？）」

自分の扱いの酷さに目を白黒させる一美。口の悪い愛情表現かもしれないが、何かアブノーマルな雰囲気がある愛情だ。

「お、もうお前ら集まってたのか。全く仲良しだな」

彼女達の輪に取材を振り払って来たミヒルにエトナやヘレーネ、レイ、シャロンといった別働班も輪に加わる。

それから数分間に渡って各々の良かった点や悪かった点を言い合い、戦闘隊長であるエトナが手帳に内容を全て書き込んだ。いわゆる反省会（デブリーフィング）である。

一美も訓練生時には演習終わりに同じような事をやっていたので割と違和感なく溶け込めたようだ。

そんな時だった――――

「（ん……何か来る…演習場から百キロメートル地点……数は三個以上だけど倍以下…んんん…形状まで分からない、かなり低く飛行してる…）」

全員が一通り意見を出し終えた時、演習場の遥かかなたから飛来する物体をレイの魔導アンテナが捉えた。大まかな座標は特定できたが形状までは分からない。しかし、飛行物体は高度十メートル以下で接近してきている事は分かった。

「レイどうした？　アンテナ出てるぞ？」

青い光線で編まれた笠型のアンテナがレイの頭上でくるくる回っていたのにミヒルが最初に気付いた。

「ネウロイじゃない何かが飛んできてるです。それも綺麗な編隊で……」

「なに？　綺麗な温湿布だって？　帰ったら肩に貼りたいな～」

マリアが肩を回しながら呟く。

「Ｆｏｍｅｎｔａｔｉｏｎ（温湿布）じゃない、Ｆｏｒｍａｔｉｏｎ（編隊）だ。これだからリベリアンは……」

すかさずミヒルが間違いを正す。

「（マリアさんとアリシアと一緒に私がリベリアンで一括りにされた……）」

西海岸育ちな自分と東海岸育ちなマリア、中部育ちのアリシアとを一括りにされたロゼがどんより落ち込む。

「そんなこと言ってるうちに来てますよ皆さん！」

一美の言う通り、複数の機影は演習場へ入る寸前で高度を上げながら彼女達の頭上を通過する。その存在に見物客や他隊の隊員も気付く。

「あらぁ～、航空歩兵さん達がやって来たわねぇ～♪」

待機場の真上で進路を反転する際も、編隊が乱れる事はなかった。まるで一つの飛行物体のようだ。装甲歩兵の大半はあまりの美しさに見とれてしまっていた。

「でも何か様子が……撃っただと！？」

航空歩兵が撃ったのは地上の装甲歩兵。撃たれた彼女は腹を押さえてよろよろと地面に倒れる。ミヒルは自身の目が捉えた映像に誤りが無いか何度も頭の中で再生した。

美しい花には棘があるものだ。上空の航空歩兵達は突如として地上の装甲歩兵へ向け攻撃を開始した。逃げ惑う者や抵抗するにも容赦なく銃撃を加えていく。

「あいつら頭おかしいよ！　早く隠れないと！」

「う、撃て！！」

逃げ腰なオルガの意見は通らず、エトナの命令に従った隊員達は

急いで手に持つ武器を構えて引き金を絞る。

「あれ？……しまった模擬弾だ！！」

シャロンの携帯砲が弾詰まりを起こしたと思えば、真っ赤な塗料が砲口から垂れ落ちた。さっきまで演習を行っていた自分達は実弾なんて持ち合わせていない。

「いいから撃ちなさ……」

携帯砲を航空歩兵へ向けたヘレーネへ向けてヒュンと流れ弾が飛び、運悪く弾はヘレーネの下腹部に命中する。

「あ～らら、なんだか……眠く」

ヘレーネの頭から使い魔であるアライグマの耳が消え、腰から出ていたしましまな尻尾も同様に消え去った。ヘレーネはその場にばたりっ倒れ込んだが、すやすやと寝息を立てている。

「麻酔？　魔力を吸い上げる奴かな？」

「くっそー！　こんな時に部隊の医療担当がやられるって、そりゃないよ！！」

「オルガもロゼも黙ってろ！　急いでテントまで走れッ！」

ミヒルが歩行脚を起動し、自分達のテントまで向かう。何発かは撃ったものの、気づかれてはいなかった。後の者もミヒルに続き、歩行脚を起動させた。一美も仲間に続いてテントまで走ろうと歩行脚のエンジンを起動させたかに見えた。

が――――

「（あれっ……エンジンが、エンジンがかからない！！　エンスト！？）」

我先にとテントまで逃げ込む隊員達から取り残された一美。真っ白な羽毛をフリフリさせながら必死に歩行脚のエンジンをかけようとしていた。

恐らく砂塵が駆動輪から内部に入ってしまったのだろう。エンジンをかけようとしても詰まった砂が邪魔をして異音を発させるのだ。

「（どこでも良い、どこでも良いから隠れないと！）」

皆が逃げ込んだ部隊専用のテントまでは距離が有りすぎる。仕方が無いので一美は真横に建っていたテントの隙間から中へ潜り込む。

「（誰もいない……安心安心、えへへへ）」

逃げ込んだテントは備品置き場らしく色々な機材を詰めた木箱が沢山並んでいた。一美は木箱の間にしゃがみ、ここなら大丈夫だと安心しきっていた。

――――――

「敵の総数は幾つだ！」

「凄い機動をしながら装甲歩兵を狩っているのが一人、それをもう一人が援護してます！　あっ……まだ上にも二人います！！」

戦いを始めていたのは魔女だけではない。突然の襲撃で慌てふためいている一般兵士達も大半が上空の彼女達の銃弾を浴び、眠ってしまっていた。見物に来ていた観光客や記者達は被害を被っていないのを見るに、飛行脚を穿いた魔女達は相当の手練れだろう。

既に櫓を降りていたライヒとヘッセも自分達の戦車に同乗する仲間と合流し、模擬弾を装填し対空銃架に据え付けられたＭＧ４２で以て上空のウィッチへ反撃していた。

別に撃墜しようとは考えていない。侵入コースさえ阻害すれば痛い思いをしないで済むからだ。

「くそ、早すぎる！　化け物か！」

ヘッセは銃架に付いている環型照準器を忙しく振り回し、上空のウィッチを照準の中央へ収めようにも動きが早くて適わない。

「やはり、黄の１４か……奴が来たのか…」

侵入コースの阻害もあえなく、弾幕を突破しながら仲間達へ模擬弾を命中させながら上空を掠めていったウィッチの顔をライヒは見逃さなかった。

それは、アフリカ方面カールスラント空軍の略帽を被り、紫外線で脱色しかけている短髪を靡かせたウィッチが駆けて行く光景。

彼女がいるなら―――間違いない、『黄の１４』は近くにいる！

ライヒが制帽を脱いで空を見上げようとした時、背中に何か柔ら

かいものが命中した感触を覚えたと思えば、轟音を立てて背中側から前方に頭上を掠めて行くウィッチと偶然目が合った。

黒革のフライトジャケットに薄いピンク色をした長髪がビビットである彼女は嘲笑的な眼差しでライヒを一瞥すると、そのままテントの密集地へと飛んでいってしまった。

瞼が重いライヒが見たのは、彼女に生えていた鳥の羽と、飛行脚に描かれていた『黄の１４』の文字。

第３１統合戦闘飛行隊「アフリカ」、又の名を「ストームウィッチーズ」――――アフリカ戦線に於ける最強の火消し部隊がトリポリへやってきたのだ。我々の警備の甘さを身をもって体感させるために。

「くそっ……こんな流れ弾みたいな弾で……我々に貴女達が撃てない事なんて分かっていた筈…だったのに」

いくら撃ってきたとはいえ、救国の英雄となるべきウィッチに銃口を向けるなんて事は許せなかった。機が熟した時、必ずや祖国カールスラントを救ってくれる。我々に出来なかった事を成し遂げてくれる存在だからだ。

特殊な模擬弾の効果で視界がぼやけ、遂にライヒは砂の上に仰向けに寝転んだ。黒い戦車兵の制服に細かい砂がつき、傍らに落ちた制帽も既に砂まみれとなっていた。

空襲に不慣れな装甲歩兵達は予測射撃もままならないままに狩られ、睡眠状態へ移行してしまう。運よくテントに逃げ込んだ者は助かったが、それも上空の巨砲を携えたウィッチがテントに模擬散弾

を打ち込むまでの数分間のみだった。

彼女達「アフリカ」の狩りは続く。まるでアフリカの砂嵐そのものが装甲歩兵である彼女達に挑戦をしかけているような光景が演習場にあった。

「（あ～。早く帰ってくれないかな……ちょっとこのテント暑苦しいなぁ…）」

そんな事もいざ知らず、隅にあるテントの中で汗を拭っていた一美だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7821n/

－STRIKE WITCHES－[戦車と魔女・Panzer-und-Hexe]

2011年12月7日02時47分発行